

魔法少女

#4

アイルフェリカ

小説：端音乱希 挿絵：有魚

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

目次

登場人物紹介	P2～P4
本編	P5～P61
あとがき・奥付	P62

登場人物紹介（1）

●魔法少女アルフェリカ／アルフェリカ・フォン・ザ・バーキライド

『星』の異名を持つ、最も古参の魔法少女。

異世界の王都、セントバルの近衛騎士でもある。

エビルズアークを追って、単身こちらの世界にやってきた。

「形状変化」により、ステッキを様々な武器の形に変えて戦う。

重力操作や、物体の重さを変える魔法が得意。

ルカンダにより、「性感が100倍になる紋様」と、「絶頂すると魔力を遠隔で奪われてしまう紋様」を、身体に刻まれてしまった。

エビルズアークの基地に乗り込むも、ルカンダの時間停止魔法の前に敗れ、囚われてしまう。

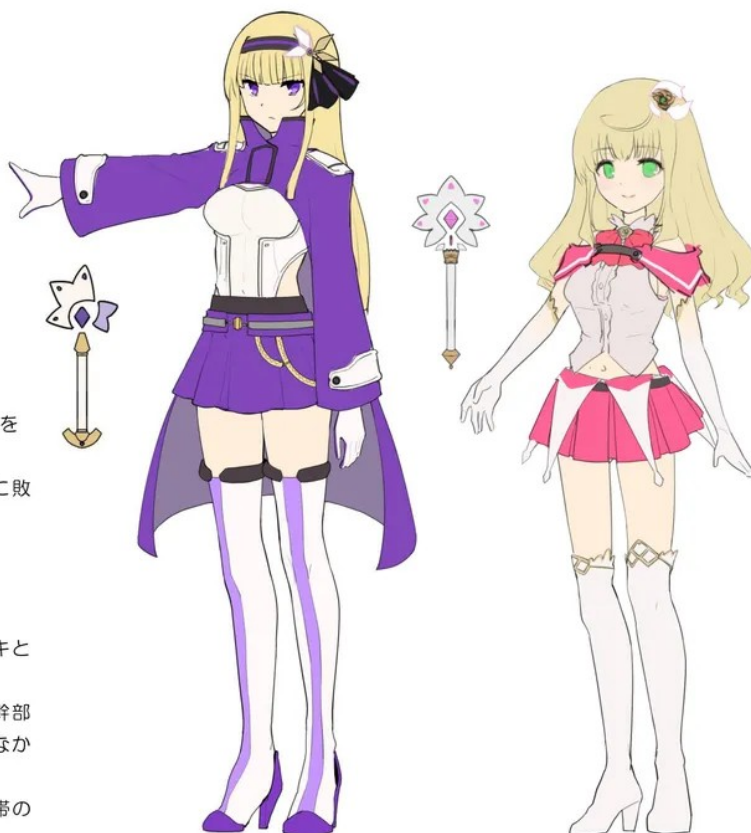
●魔法少女ノーブル・ローズ／早乙女舞華

良家のお嬢様。

友人を助けたいという強い想いが、異世界から飛来した魔法のステッキと彼女を引き合わせた。

単身エビルズアークと戦い、一度は敵の基地深くまで攻め込み、敵の幹部である四魔将との戦いに勝利するも、アーク・デュランを討つには至らなかった。

エビルズアークに捕らえられ、ルカンダの紋様によって、全身を性感帯のような感度にされてしまう。



登場人物紹介（2）

●魔法少女シャーリー／小日向沙織

魔法少女プリズム・シャーリーとしてエビルズアークと戦っていたが、敵の策略により人間を憎むようになり、魔法少女エビルズ・シャーリーへと堕ちてしまう。

魔法少女ノブル・ローズと戦い、善の心を取り戻したが、これまで悪に加担していたことを悔やみ続けている。

アルフェリカと共にエビルズアークの基地に乗り込むが、敗北し、捕らえられてしまう。



●アーク・デュラン

「エビルズアーク」の首領。触手の集合体。

アルフェリカ達に追いつめられ、こちらの世界に逃げのびてきた。一時は仮死状態になっていたが、収集した魔力で復活を果たす。



登場人物紹介（3）

<アーク・デュラン配下「四魔将」>

●ルカンダ

女性型で悪魔のような外見をしている。
相手に様々な効果を付与する「紋様」を刻むことができる。

●Dr.バルド

白衣を着た科学者風の男。人々から集めた魔力を用いて、
人工生物である「バイオ兵」や「怪人」を生み出す。

●グリーヴァ

体がスライムで構成された魔法生物。

●レスター

アーク・デュランの娘で触手の集合体。
可愛らしい外見は人間に擬態したもの。



魔法少女アルフェリカ 第4話

襲い来る民衆と触手、犯し尽くされる魔法少女

32

どれくらい時間が経過しただろうか。

私たち3人の魔法少女は触手で作られた部屋の中にいた。

変身が解除された全裸の状態、手足を肉の壁に埋め込まれ、全身を粘液や精液まみれにされながら、触手による責めを受け続けている。

「んあっ、んんっ、んっ、あっ、やつ……あ、ああ……！」

シャリーこと小日向沙織は、比較的体力を残していると判断されたためか、大量の触手に群がられている。びちびちと勢いよく触手が全身を撫でまわし、太いモノが激しく膣内を出入りしていた。

「……あっ……ん——あ、ああ………んっ——」

ノーブル・ローズこと早乙女舞華を責める触手の動きは、対照的にゆっくりとしていた。彼女の全身、あらゆる場所に紋様が描かれており、触手はその紋様を優しく撫でている。

膣内には触手が突き刺さっており、抽送の動きだけは激しい。

「くっ、あ……ああっ……！！ ひぐっ、んっ……あう……あ、ああ……！！」

そして、私、アルフェリカもまた、触手に犯され続けていた。

ルカンダによって時間を止められ、その間に犯され続けていた刺激を一度に受け、脳が焼き切れるのではないかと思うほどの快感に襲われた。快感と同時に全身の神経に激痛が走り、何度も意識を飛ばし、最後には完全に気を失ってしまった。

そして目が覚めても……私は犯され続けている。

（いつまで、続ける気……？ このままでは、3人とも、壊れてしまう……！！）

3人とも、とっくに魔力は尽きていた。このまま犯し続けても、触手は魔力を吸収することはできない。にも拘わらず、触手の動きは止まらない。

（今度こそ、私たちを壊すつもりか……？）

3人とも、ルカンダの紋様により、性感が100倍にまで高められていた。わずかな刺激でも、それが100倍にもなれば、人間では御しきれないほどの快感となる。

このまま責められ続けたら、いずれ脳が快感に溶かされ、人ではなくなってしまうだろう。

「あぐっ……いっ……あがぁあっ……んが……あ……っ……」

（私たちは、ここで終わるのか……？）

私の心の中は既に、絶望に染まっていた。魔力もない、ステッキもない、あるのはこの、性感を100倍にされた身体だけ……

「………あっ……」

（また、いった……）

散発的な絶頂。感覚が上がっているはずなのに、体力が底をついているせいか、絶頂に対する反応が鈍くなっている。

私が壊れるのが近い。

いや、もう壊れているのかもしれない。
「……」

じゅぐっ！　じゅぐっ！　じゅぐっ！
触手は私たちを犯し続ける――

33

「……！」

（ここ、は……？）

次に意識を取り戻したとき、私は牢の中にいた。

3方向を頑丈そうな金属壁に囲まれ、一方向を鉄格子で塞がれた空間。壁の材質を見るに、おそらくここもエビルズアークの基地の中だ。

（生きている……）

私は、自分の肉体が呼吸していることに、驚きを感じていた。てっきりあのまま、触手に犯されながら最期を迎えると思っていたのに……

私は金属の壁に背中を預け、座った状態で気を失っていたようだ。一糸まとわぬ全裸の姿。身体に付着していた粘液や精液はきれいになくなっている。

「アルフェリカさん……大丈夫……？」

目覚めた私に対し、声がかけられた。

「シャーーー……あなたも、捕まったのね……」

シャーーーこと小日向沙織も、全裸の状態で見事に寄りかかっていた。そして、私と沙織に挟まれているのは……

「舞華……！」

早乙女舞華だった。

私たち3人は、互いに身を預け、寄り添っていた。座った姿勢で気絶していたにも関わらず、体が倒れなかったのは、互いが互いの体を支えていたためだ。

全裸の体で金属の床に座らされ、身体は冷えていたが、舞華の体に接する部分だけが、ほのかに温かみがあった。

「しっかりして、舞華……！」

私は舞華の体を掴もうとして――思い止まった。

「舞華……紋様が……」

その肢体には、数えきれないほどの紋様が描かれていた。

「触っちゃダメ……紋様の場所が、性感帯みたいになるって、ルカンダが言ってた。お腹の紋様で性感が100倍になっているから、下手に触ると100倍の快感に襲われちゃう」
沙織が警告する。

「そんな、っ……こんな、ひどいことをっ……！」

私はルカンダに対して激しい怒りを覚えた。無垢で純真で、正義感溢れる少女が、なぜこのような仕打ちを受けなければならないのか。

全身が性感帯になり、さらに感度が100倍になった状態で、触手の愛撫が続けられて

いた……計り知れないほどの快感が彼女を襲っていたに違いない。

「舞華……舞華……！」

私は彼女の顔を覗き込んだ。うつすらと開いた瞼の間から、虚ろな瞳がぼんやりと虚空に視線を彷徨わせている。

「アルフェリ、カ、さん……」

微かに囁くような声が、舞華の口から発せられた。

「こめ、なさい……私を助けるために……2人とも……こんなことに……」

「違うんです、舞華……！ 私不甲斐ないせいで、舞華が……くうっ……」

悔しさと悲しみで、頬に涙が流れ落た。

「そんなこと言ったら、私だって……」

気づけば、沙織の瞳からも涙が溢れていた。

「私をもっと早く……戦いに参加できていたら、こんなことには……ううっ……」

「シャーリー……くっ、うう、うう……」

私と沙織は、舞華に両側から抱き着きながら、嗚咽に身を震わせた。

私の涙が舞華の頬に零れ落ちる。

「泣かないで、くだ、さい……」

その時、舞華が小さく身を震わせ、顔をわずかに動かした。彼女の唇が、私の唇に押し当てられる。

「つぶう……！」

（……!? 舞華、どうして、私に口づけを……?）

彼女の舌が私の口の中に入り込んでくる。するとその瞬間、舞華からわずかな魔力が流れ込んできた。

（私の魔力を回復させてくれるの……?）

しかし、舞華から魔力が流れ込んできたのは、一瞬だった。

凌辱によりすべての魔力を失った舞華が、触手から解放された後、僅かな時間で回復させたであろう魔力が、私に送り込まれたのだ。

「んちゅっ、ぶはあっ……はあ、はあ……舞華……?」

魔力を受け渡した舞華は、私から唇を離すと、弱々しく微笑んだ。

沙織が舞華を心配そうに見つめる。

「早乙女さん、魔力を渡したの? 舌にも紋様があるせいで、キスだけでも、ものすごく感じるはずなのに……」

舞華はキスにより性感を得てしまったのか、身体が、びくん、びくと震えていた。

「アルフリ……カ、さん……私の魔力、屈きましたか……?」

「ええ、屈きました……でも、どうして……?」

「諦めないで、くだ、さい……」

「舞華……」

その一言で、私は彼女の気持ちを理解した。と同時に、胸が切なさを締め付けられた。（舞華は、こんな状況でも、まだ諦めていない……! 魔力を補充して、それで戦って、そう言っている……!）

今この場所に、魔法のステッキはない。3本ともエビルズアークに奪われ、今はどこに

あるか分からない。

いくら魔力を補充できても、ステッキがなければ魔法少女に変身できず、エビルスアークに反撃することはできない。だが、私たちはまだ、生きている。いつステッキを手にするチャンスが来るか分からない。希望を捨てずに、魔力を溜めておくと、そう舞華は私に伝えていた。

「諦めないで、か……」

沙織は、舞華を見つめながら、何かを考えているようだった。やがて、意を決したように、私の方を向くと、

「えいっ！」

「んぐぐっ!？」

唇を押し当てて来た。

(シャーリーも、私に口づけを……!?)

舌が絡み、沙織の魔力が、私に流れ込んでくる。

彼女からの魔力も、すぐに尽きてしまう。だが、舞華からの分と合わせて、確かに私の中に魔力が存在していることが感じられた。

「シャーリー……何を？」

「……別に。私も、諦める気はないってこと。その意思表示。早乙女さんをこんな状態にしたあいつらを、絶対に許さないから……!」

「ええ……許す気はありません。エビルスアークが何を考えて私たちをここに捕らえているかは分からないけれど、私たちを生かしていることを、必ず後悔させます……!」

私と沙織は、力強く頷き合った。それに呼応するかのように、舞華の体がびくんと動く。

(そっだ。私たちは、最後まで絶対に諦めない。どんなに絶望的な状況だって、耐えて耐えて耐えて、必ず逆転のチャンスを掴んでみせる……!)

私は拳を握り締めながら、強い決意を胸に抱いた。

34

私たちがここに囚われてから、体感で約10日が経過した。

その間、牢の中の生活は地獄だった。

3人とも、性感を100倍にされており、身体中が常に疼きに包まれていた。特に舞華は紋様により性感帯を増やされているので、その疼きは私の比ではないはずだ。

私たちの股間からは、常に愛液が溢れ出しており、複数の水たまりが床にできている。

しかし、私たちは決して自慰行為はしなかった。

ここで自慰をして絶頂すれば、魔力が放出され、紋様の効果でルカンダに吸収されてしまう。それは絶対に避けなければならないことだ。

私たちは冷たい床の上で3つの身体を寄せ合いながら、快楽に決して屈しまいと、互いの手を握り合い、耐え続けた。

「んちゅっ……ふぁ……っ……はぁ、はぁ……舞華、ありがと……」

「いえ……今の私には、これくらいしか、できませんから……」

時折私は、舞華や沙織と唇を重ね、魔力の供給を受けていた。粘膜的な接触は性的刺激を煽る危険な行為だったが、この行為だけが反撃に備えて今できることだ。

舞華の精神状態は、徐々に回復しているように見える。ここに囚われた最初の頃と比べると、視線を合わせて、しっかり受け答えができるようになっていた。

「次は、沙織、お願いします……」

「うん……ちゅ、く……」

舞華に続いて、沙織と唇を重ねる。彼女の魔力もまた、濃厚なものだった。

舞華の魔力と沙織の魔力が、私の体内で混ざり合っていく。2人の力が私の力になっている。その思いが、私の心に希望を残し続けていた。

私の魔力は10日間で見るとみるみる回復していた。あと1日もあれば、この魔力供給行為も必要なくなるだろう。

「ありがとう沙織。今日はこのあたりで」

「ぶは……うん。また、ね……」

私の魔力だけ回復しても意味がないので、2人にも魔力を蓄積してもらっている。3人の魔力量が常に丁度いいバランスを保てるよう、日々調整しているような状態だ。

「しかし、いつまで私たちをここに閉じ込めておくつもりなのでしょう」

口づけ直後の気まずい雰囲気は払拭すべく、私は沙織に話しかけた。

「魔力が欲しいなら、とっくに犯しに来ているはずなのに……何か企んでいるのかも」

「だとしても、何を企んでいるのか、見当もつきませんね……」

「私の時は……うっ！ 私の、時は……！」

「シャーリー！ 大丈夫ですか!？」

突然沙織が頭を押さえてうめき声をあげた。外的要因による痛みではない。だとすれば

（彼女の過去……苦しみを思い出している……？）

彼女が悪に身を堕としたのは、エビルズアークにより人間を憎いと思わされたことが原因らしい。今の会話が、人間による酷い仕打ちを呼び覚ましてしまったのだろうか。

「はあ……はあ……大丈夫……でも、気を付けて……エビルズアークは、平気で人の心を踏みにじってくる……心を強く持たないと、私みたいに……うっ……」

「分かりました。だから、もう思い出さなくていいですよ」

（彼女の心の傷を取り除くことができれば、プリズム・シャーリーに戻ることができるかもしれない……）

しかし、その方法は、今の私には見当もつかないことだった。彼女を救うには、私は彼女のことをまだ知らなさすぎる。

沙織は深い呼吸を繰り返しているうちに、徐々に落ち着いてきたようだった。

その時、鉄格子の向こう側にパイオ兵が現れ、私たちの食事を床に置いて立ち去っていく。毎日食事が提供されるため、私達は飢え死にする心配はなかった。

今のパイオ兵1体くらいなら、ステッキがなくとも、私の魔法で倒すことができるかもしれない。しかし、鉄格子を破壊するほどの威力のある魔法は使えないため、外のパイオ兵だけを倒しても意味はなかった。

（チャンスが来ると信じて、待つしかないか……）

エビルズアークに動きがあったのは、その翌日のことだった。
それが反撃の糸口になるのか、それとも……

35

私たちは、パイオ兵により、乱暴に牢から叩き出された。抵抗するかどうか迷ったが、相手の数が多いため、大人しく従うことにした。

パイオ兵の先導により、私たちは牢の前の通路を進んでいく。舞華の体力が完全に回復しておらず、自力での歩行が困難だったため、私と沙織が左右から彼女の身体を支えながら歩いた。

やがて通路の先に、開けた空間が現れる。

（これは、転移魔法陣……？）

部屋の床一面に、魔法陣が描かれていた。これは、立ち入った者を別の場所へと転移させる高等魔法だ。

（ルカンダの仕業か……）

今のエビルズアークでこの魔法陣が作れるのは、時間と空間を操るあの悪魔族くらいだろう。

「舞華、アルフェリカ……気を付けて……これ、どこに繋がっているのか、分からない……くう……」

沙織が苦しそうに呻きながら警告する。彼女は一度、この魔法陣に入ることがあるのだろう。そして、転移した先で、恐ろしい目に遭った。それが、エビルズ・シャーリーへ変貌する引き金になったに違いない。

「しかし、入らないわけにはいかないようです」

背後からパイオ兵が、魔法陣に入れと圧力をかけてくる。

「大丈夫です……今度は3人一緒ですよ」

舞華が沙織を励ます。その言葉により、沙織の頭痛が収まったのか、意を決したように頷いた。

「そうね……行きましょう」

「ええ」

私たちは、3人同時に魔法陣へと足を踏み入れた。すると、床に描かれた文字が怪しく発光し、魔法が発動する。光に飲み込まれた私たちは、一瞬の後に、別の場所へと転移した。

36

「うおおおおおおおおおっ!! きたああああああああっ!!」
地鳴りのような叫び声が、巻き起こった。

「!?」

私たちが立っていたのは、木々が生い茂る公園の中にある、野外ステージの上だった。太陽が高く昇っているということは、時刻は正午近くということになる。

そして、そのステージを取り囲んでいたのは……見渡す限りの、人、人、人……

「これは……!」

私たちはその光景に圧倒された。大勢の男たちが視界を埋め尽くし、興奮した表情で叫んでいる。私は自分の露出した局部を隠すことすら忘れ、その光景を呆然と眺めていた。

「さて、主役が登場したわよ!」

ばさり。短い羽根を振りながら、私たちのすぐ傍に、ルカンダが着地する。

「ルカンダっ! 貴様! これは……!」

「はいはい。アルフェリカ、慌てないの。ちゃんと説明するから」

ルカンダはそう言いながらも、私達ではなく、周囲の男たちに向かって叫んだ。

「待たせたわね! 今から『魔法少女狩り! 捕まえたら即レイプ!』を開始するわよ!」

「うおおおおおおおおおおおっ!!」

「待ってましたあああああああああっ!!」

「魔法少女、犯らせろおおおおおっ!!」

再び男たちが騒ぐ。集まっている男たちの姿を見た時から、概ね予想はできていた。

彼らは、私たちを犯すために集まっているのだ。

「くっ……下衆どもめ……!」

この世界の男たちは、皆こうなのだろうか。これでは、プリズム・シャリーが人間に絶望し、エビルズ・シャリーになったのも仕方がなく思えてくる。

「ふふふ。すごい盛り上がりね。じゃあさっそく、準備をしましょうか。パイオ兵達、この娘達を拘束しなさい!」

「なっ……! くっ……何を……! 離せっ!」

ルカンダの合図で、後ろに控えていたパイオ兵が、私達3人を羽交い絞めにして拘束する。変身していない今の状態では、その腕を引き剥がすことができない。

「くっ……何を……!」

「だって、そのままの姿じゃ、魔法少女狩りにならないでしょう? 変身させてあげるから、大人しくしてなさい」

「なんだと……!?!」

ルカンダは、私達3人のステッキを取り出した。そのうちの一本、星のステッキを、私のお腹に押し付ける。

「さあ、ステッキに触れているから変身できるでしょ?」

「……」

確かに、ステッキに肉体が触れている今なら変身できる。だが、魔法少女への変身が完了する直前で、お腹からステッキを離すつもりなのは容易に想像できた。ステッキと接触していなければ、いくら魔法少女に変身できたとしても、その力を発揮することはできない。

「どつしたの? みんな待っているんだから、早く変身しなさい」

「お前たちの道楽のために、魔法少女の姿になるつもりはない……!」

「あら？ 面倒なことを言うのね？ 変身しないのなら、他の2人を殺すわよ？」
「く……」

これから私たちを奪めようというのに、命を奪うはずがない。そう分かっているけど、彼女たちに危険が及ぶ可能性がゼロではない以上、素直に従う他なかった。

私はステッキに魔力を送り込み、魔法少女の姿へと変身する。体がまばゆい光に包まれ、光の中から魔法少女の衣装が出現した。

「はい。初めから素直にそうしなさいな」

変身の途中で、ステッキがお腹から離され、ステッキとの接触を断たれてしまった。

「それじゃあ、他の2人もちゃっちゃと変身するのよ」

ルカンドが舞華と沙織にステッキを押し当て、2人を変身させた。彼女たちもまた、変身完了前にステッキを離されており、魔法を使う機会を与えられなかった。

その間ずっと、ルカンドは私の動きを警戒している。私がステッキなしでも簡単な魔法を使えることを知っているからだ。今魔法を使えば、パイオ兵の拘束を解くことは容易いが、すぐにルカンドに取り押さえられてしまうだろう。

「さあ、獲物が3人そろったわよ！」

「うおおおおおおおおおっ!!」

魔法少女3人がステージ上に並び、男達の高揚が最高潮に達しようとしていた。その目は欲望にまみれており、私達3人を奪めることしか考えていない。

「じゃあ、ルールを確認するわよ」

「ルールだと？」

「あら？ あなた達にとっては、悪い話じゃないわ。ルールは簡単。私の合図から3分間は、みんな“何もしない”の。ここで待機するだけ。その間、あなた達は好きに逃げるといいわ」

（私たちを逃がす……？ 何を考えている？）

「3分経ったら、ここにいる全員があなた達を追いかけて捕まえる……捕まったら何をされるか、分かるわよね？」

「よってたかって、女を犯すのか？ 最低だな」

「ふふふ。最低ですって。残念だけど、ここにいるみんなにとっては善め言葉になっちゃうわよ。みんなはね、エビルズアークへの協力者なの。エビルズアークに協力する見返りとして、魔法少女を犯す機会を用意したってわけ」

（エビルズアークに協力する者が、こんなにいるのか……）

私たちを犯すために集まっている時点で、説得はできないだろう。

「そうそう。あなた達が犯されて、絶頂しても、紋様の力でちゃんと魔力は回収できるから、心配しないでね」

明らかに私たちが捕まり、犯されることを前提としたゲームだった。だが、私たちは、下衆な男たちに、身体を好きにさせるつもりなどない。

（3分の間に、逃げきるしかないか……）

私は隣にいるノープル・ローズとシャーリーに視線を送る。2人とも、目の前の興奮する男たちに怯えているようだったが、私の意志を感じ取ってくれたのか、視線に対して頷きで返してくれた。

（絶対に、逃げ切ってみせる……！）

「それじゃあ、合図を出すわよ！ 今から3分間、せいぜい遠くに逃げることね……開始よ！」

ルカンダの合図と同時に、パイオ兵が拘束する腕の力を弱めた。私たちはパイオ兵の腕の中から脱出すると、ステージの裏手にある茂みの中へ身を躍らせた。

「シャーリー！ ノーブル・ローズ！ どちらに逃げるべきかわかりますか？」

「こっち！ このあたりは詳しいから、ついてきて！」

シャーリーが案内役を買って出た。この世界の地理に疎い私では、その役をこなすことはできない。

私たちはしばらく、公園を横切るようにして走り続けた。魔法少女の姿になってはいたが、ステッキを手にしていないため身体強化の恩恵を受けることができず、運動能力は変身前と変わらない。

私は王国の近衛騎士として修練を積んでいるため、ある程度の運動能力は保持している。しかし、この世界の一般人である2人は、全力で走り続けるだけで肉体にかなりの負担がかかっているようだった。

「あ……！」

最後尾を走っていた舞華が、足をもつれさせ、転倒する。

彼女は全身に紋様を刻まれた状態で、長時間触手に犯されていた影響により、体力が十分に回復していないのだ。

「ノーブル・ローズ！ しっかり！」

私と沙織が舞華にかけより、両側から支えてその身を起き上がらせる。

「はあ、はあ……私は、足手まといです……2人だけで、逃げてください……」

「何を言っているの!? 早乙女さんを置いてなんていけないよ!」

沙織が舞華の肩を担ぐ。絶対に離さないという意思表示に見えた。私も反対側から舞華の肩を担ごうとした……その時、

『うおおおおおおお……！』

遠くから、男たちの叫び声と共に、大地を揺らす大勢の足音が聞こえ始めた。

（もう3分経ったのか……！）

ここで立ち止まっていたは、すぐに追いつかれてしまう。かといって、舞華を支えながら移動しても、追いつかれるまでの時間がわずかに伸びるだけだろう。

選択肢は少ない。

（ならば、今度こそ私は……！）

私は心に決めた行動をとるべく、その場で振り返り、元の方へへと走り始める。

「アルフェリカ!」

シャーリーが驚きの声を上げた。

「シャーリー、ノーブル・ローズを連れて行ってください！ 私が時間を稼ぎます！」

「そんな……ダメっ！ 戻って！」

「このままでは3人とも捕まります！ あなた達だけでも、逃げ延びてください！」

「アルフェリカ……！ くうっ……！」

沙織が私に背を向け、舞華を担いで走り出す。

（ありがとう、沙織……そして、さようなら、舞華……）
「アルフェリカさんっ！」

舞華の悲痛な声が背中越しに聞こえた。

しかし、私は振り返らなかった。

男たちの声と足音が、すぐ近くまで迫っていた。

37

公園を出て、ビル街に入った。

早乙女さんを抱えた状態なので、早くは動けないが、少しでも襲い来る男達から離れるべく、歩を進める。

（アルフェリカ……ごめんなさい……）

私は彼女を見捨てた。あのままでは3人とも捕まるという彼女の言葉が、正しいと思ったからだ。早乙女さんと、自分を守るため、私は仲間を置き去りにしたのだ。

その事実が、重く心に押し掛かる。しかし、早乙女さんを安全に逃がすため、今は前に進むしかない。

（街が、こんなに荒れている……!）

逃げながら周囲の光景を目にし、私は愕然とした。エビルズアークの暗躍で徐々に街が荒廃していたのは知っていたが、私たちが捕まっている間に、ますます酷くなっていた。道路には荒らされた車や、割れたビルの窓ガラスが散乱しており、日中だというのに人の姿がない。見知った場所が変わり果てた姿になっていることに、ショックを受けた。

しかし、私はエビルズアークに対して、怒りを覚えることができない。なぜなら、少し前まで、私もエビルズアークの一員だったからだ。街がこのような姿になっているのは、彼らの悪事に加担していた私のせいでもある。

（私はもう、この街にはいられない……）

この事実から目を背けるため、私は早乙女さんの屋敷に閉じこもっていた。だが、それはもう終わりにしなければならない。

まずは早乙女さんを屋敷に連れ戻して、それから――

「いたぞ！ あっちに2人いる！」

「……!?!」

叫び声でした。後方の交差点に、男が1人立っている。

（見つかった!）

男は仲間を呼びに行ったのか、私たちの前から姿を消した。ここには、すぐに大勢の男たちに追いつかれてしまう。

（どこか、隠れる場所は……!）

私は周囲を見回した。近くのビルは封鎖されて入れそうにない。

その時、私の目に留まったのは、一台のバスだった。事情は分からないが、路肩に停車したまま放置されている。乗車口は開いており、中に入るのは容易だ。

（早乙女さんを、この中に……!）

私は早乙女さんを支えながら、バスの中に入る。そして、外から見えない位置にある座席に彼女を横たえた。

「早乙女さん、ここにいて……！」

「……？ 小日向さん、あなたは……？」

「私は外の奴らを引き付ける！」

「そんな……！ 私のことはいいですから、あなただけでも逃げてください……！」

弱々しく起き上がろうとする早乙女さんを、私は座席に押し付ける。

「あなたは、私に光をくれた人だから……！」

私は親愛なる友人の姿を目に焼き付けようと、彼女の顔を凝視した。

これが、最後になるかもしれないから。

「いい？ 絶対ここから動いちゃダメだよ！」

私はそう言い残すと、バスの外に飛び出した。

（お願い、見つからないで……！）

私はそう祈りながら、先ほど男が立っていた交差点の方に向かう。

（奴らの注意を引き付けないと！）

交差点に到着すると、右手から大勢の男たちが駆け寄ってくるのが見えた。

「いたぞ！」

「逃がすな！」

「捕まえて犯せ！」

私は、彼らから逃げるべく、左手方向に向かって駆け出す。

（絶対に、捕まるもんかっ！）

彼らは私に狙いを定め、交差点を直進してくる。早乙女さんの乗ったバスの方に向かう

人はいない。

「よし……！」

ひとまずは狙いどおりだ。

だが、早乙女さんから注意を逸らせた分、私が危険になっている。幸い、追ってきてい

る連中とはまだ距離があった。このままどこかの路地に逃げ込んで、撤いてしまおう。

そう思った時――

ピシッ！

「!!」

背中、肩の部分に激痛が走った。あまりの痛みに、その場でよろめいてしまう。

「ぐっ……何っ……!? ——ぐあああああっ!!」

高速で飛来した小さな物体が、連続で背中を打ち、その衝撃と痛みで私は道路に倒れた。

（これは銃……？ エアガン……？）

私を追いかける男たちの集団の中に、ライフル銃らしきものを構えている人が数人いた。

その中から放たれた弾丸が、私の体に命中したのだ。

これが本物の銃ならば、魔力で強化されていない私の体を貫通しているはずなので、あ

の銃は偽物ということになる。だが、偽物といえども、それが命中した時の痛みは、思わ

ず呼吸を忘れるほどに強烈なものだった。

（そんな……飛び道具まで……ううう……）

男たちはほとんど距離を詰めている。私は痛みに耐えながら、なんとか半身を起こしたが、

「くあああああっ!!」

「ヒシ! ヒシ! ヒシイ!!」

無防備な背中を再び銃弾が襲った。腕から力が抜け、再び道路に倒れ伏す。

ドドドド。男たちの足音が近づき、そして止まった。

倒れる私の周囲を、男たちが取り囲んでいる。

「よう、シャーリ!! また会ったな!」

「……? うああっ!!」

1人の男に髪の毛を乱暴に掴まれ、顔をぐいっと持ち上げられる。

目の前にあったのは、見知ったサングラスをかけた男だった。

「あなた……」

「この前の仕打ち、たっぷりお返ししてやるぜ。その身体になあ」

サングラスの男が言う、この前の仕打ち、とは、私が彼らのアシトから、アルフェリカさんを救出した時のことだろうか。私は衝動に駆られてこの男を殺しそうになったが、なんとか思い止まっていた。

だが、目の前の男はそれに感謝したりはせず、逆に恨みを持っているようだった。

「こんなことになるなら、殺しておくべきだった……」

「はっ! 言うじゃねえか。そんなザマでよお」

「私を、犯すの……?」

「もちろん! 犯して、輪姦^{まわ}して、ぐちゃぐちゃのドロドロにして……その様子を全部撮影して、バラまいてやる」

「……この、人でなしっ!」

「なんとも言いな。よしお前ら、移動するぞ。こいつを運べ」

数人の男が倒れている私を起き上がらせた。

「移動……? ここで犯すんじゃないの?」

「慌てるなよ。ちゃんとい場所用意してある」

サングラスの男の口元が、ぐにやりと歪んだ。

38

到着したのは、お城のような外観で派手な装飾の付いた建物——いわゆるラブホテルだった。

私はその最上階、一番広い部屋に連れ込まれた。男たちはベッドには目もくれず、部屋に備え付けられた、だだっ広いプールの中に私を運び込む。

（どうして、えっちなホテルの中に、こんなに広いプールが……?）

「きゃあああっ!」

私はプールの中に突き落とされた。プール内には、薄く5センチメートル程度の水しか張られていなかったため、とても危ない行為だった。怪我をしないように、私は両手両足

でプールの中に着地する。

「何を——えっ……これは……!」

プールに敷かれた液体の感触に違和感を覚える。それはただの水ではない。粘性のあるどろりとした液体。ローションというやつだ。

「なんでこんなもの……」

「今日は特別に、水の代わりに入れてもらったのさ。分かっているとは思うが、それはただのローションじゃないぞ?」

「えっ……?」

「特製の媚薬ローションだ。何度かお前に塗り込んだことがあるから、身体が覚えているんじゃないか?」

そう言われてはとした時は、既に手遅れだった。私は全裸の状態で変身したため、シヨーツを身に着けていない状態だ。着地の際に剥き出しの股間がローションに触れてしまっている。

どくん、と、媚薬の効果で身体の奥底から疼きが巻き起こった。ルカンダによって刻まれた性感を高める紋様との相乗効果で、瞬時に身体が熱くなる。

「はあ、く、うああ……? こんな……うああ……!」

莫大な疼きにより、私は立ち上がる力すら失ってしまった。股間を媚薬ローションの中から引き上げたいのに、べたんこ座りのまま腰がまったく動かない。

「どうした? さっそくエロい声を出して。安心しろ、これからたっぷり気持ちよくさせてやるからな」

プールのある室内に、次々と男が入り込んできて、プールサイドを埋め尽くした。彼らは身に着けていた衣服を脱ぎ、全裸になっていく。

彼らの股間にあるペニスは、私という獲物を前に、大きく反り立っていた。

（一体何人いるの……? 全員の相手なんて、無理っ……!）

「いや……来ないで……いやあ……」

「カメラのスタンバイはOKだな?」

サングラスの男は、撮影用カメラを担いだ男に確認を取り、大きく頷いた。

「よしお前ら! 早い者勝ちだ! シャーリーを犯せ!」

「いよっしゃああああああ!!」

何十人もの男が、一斉にローションプールの中に入ってきた。

「ひっ! いやっ……いやあああああっ!!」

全方位から迫る男達。逃げ場はどこにもない。

1人の男が、しゃがむ私を背後から抱きしめる。

「くあっ……やめっ! 離し——ひううっ!」

男は媚薬ローションを手で掬うと、私の胸に塗り込んできた。インナーの隙間に指を挿し込み、直接胸を弄り始める。媚薬の効果で、塗り込まれた胸がじんと熱くなり、感覚が増していく。

「ぬるぬるがっ……んんっ! ダメっ……あああっ!? そんな、揉まないでっ……! はうううっ……乳首、こりこりって、しないでっ……あああっ……!」

「おいおい。胸揉まれただけで感じすぎだろ。どれだけ敏感なんだよ」

「くあっ……これは、紋様でっ……んひっ、あっ、あああっ……感度、100倍に……んんっ！ あっ！ ダメっ……そんなに摘まんじゃ……あうっ……んんんっ!!」

「何言ってるのか意味分かんねえよ」

「何にしろ感じているんなら、遠慮はいらねえな」

周囲の男たちが、私の身体にローションを塗り込んでいく。コスチュームが濡れ、身体にびっちり張り付いていく。媚薬の効果で、全身の感度がますます上昇していく。

「あううっ……ぬるぬるが、身体中に……いやあ……」

「下はどんな具合だ？」

サングラスの男が私の正面にしゃがみ込み、私のスカートをめくりあげる。露出した秘部を周囲の男たちが一斉に覗き込んだ。

「おいおい。ノーパンかよ」

「まじか、魔法少女、淫乱すぎるだろ」

「プリズム・シャーリーからエビルス・シャーリーに堕ちて、変態になっちまったのか」

「ひぐっ……見ないでっ……ああ……これは、変身の前から……」

「おらっ！」

サングラスの男が、指を2本、私の膣内に捻じ込む。

「んひひひひひひひひ!!」

指の挿入と同時に、プール内を満たす媚薬ローションも、膣内へと滑り込んでいく。体内の粘膜を刺激され、どくん、と身体が脈打った。

くちゅくちゅくちゅくちゅ……!!

ローションが絡んだ男の指が、私の膣内をかき回す。

「あっ！ んんんっ！ くあああああっ！ やっ、いやあああっ!! 激しいっ……なか、ぐちゃぐちゃにしないでっ……あああああああっ!!」

男の指の動きが激しくなるにつれ、性感も高まっていく。紋様と媚薬ローションで過敏になっている身体が、膣と胸への同時の刺激に耐えられるはずがなかった。

あっさりと上り詰めていく。

（んんっ！ ダメっ！ イくっ！ イかされるっ……ああっ？）

「そろそろいいか」

男の指が膣内から引き抜かれた。上り詰める寸前だった私の性感がお預け状態となり、身体中に切ない疼きが充満する。

「あ……ああ……」

サングラスの男に、絶頂を寸止める意思はなかったのだろう。だが私は、反射的に恨めしそうな視線を向けてしまっていた。

その視線にサングラスの男が気付く。

「なんだ？ シャーリー、イきたかったのか？」

「……っ！ そんなわけ、ない、からっ……!! 私、イきたくなんて……」

否定の言葉を口にはしたが、サングラスの男の言うとおりだった。

（身体が、熱い……こんなこと思っちゃダメなのに……イきたい……うう……イきたいよお……）

牢の中で自慰の誘惑に耐え続けていたことで、ここに来る以前から、身体の疼きは強い

状態だった。そこに媚薬ローションを塗られて、敏感な部分を愛撫されたのだ。もう理性をコントロールすることなど、不可能だった。

「あぐっ……はあ、はあ……んっ……はあ……」

（どうせ私を犯すつもりなんですよ……？）

目の前に、男のペニスがある。あれが、私の中に挿入されたら、どれほどの快感を生み出すだろうか。拒まなければならないと思いつつも、目が離せない。

「やれやれ。強情なのは変わってないか。だったらこいつで素直にさせてやる！」

サングラスの男が私に覆いかぶさる。媚薬ローションに浸かった私の膣口目掛けて、反り立った一物を突き出した。

ぐじゅり！

何の抵抗もなく、私の膣はペニスを受け入れた。ぬるりと、ローションによってペニスが勢いよく滑り、私の膣奥を激しく叩く。それだけで、

「んあっ!? んんっ！ んあああああああっ!!」

私は達した。

（私、入れられただけで……ああ……気持ち、いい……!）

渴望していた絶頂に、私の身体は歓喜の震えに包まれた。脳が薄け、何も考えられなくなる。

「おいおい、挿れただけでいく奴がいるかよ！」

「ははははは！」

男たちの揶揄など、もう耳には届かない。

じゅちゅっ！ じゅちゅっ！ じゅちゅっ！

ペニスの抽送による快感が、私の身体を支配していた。

「んあぐっ！ んっ！ あっ、あああああっ！ 奥まで、ずんずん来て……ああああっ！

んっ、ダメっ……んんんっ!!」

「何がダメなんだ？ 気持ちよさそうな顔をして、またすぐにもイきそうじゃねえか」

「もっと激しくしてくれなきゃ駄目ってことだろ？」

「そうかそうか。じゃあもっと激しく突いてやる」

男の腰の勢が増し、じゅぶじゅぶと激しく膣内が抉られる。ペニスの先端に膣壁を擦られ、腰から背中にかけて痺れるような快感が走り抜ける。

「んあっ！ んっ！ ああああああっ！ あっ、んんっ！」

「最初はギチギチだったのに、今はもう、すっかり馴染んじまったな。こんなに淫乱おまんこになっちまって、俺は悲しいぜ」

「くっ……うろううろうっ……言わないで……んあっ、あ、くっ、んんあああああっ！」

「ってかなんだよ、その恰好は。正義の味方してますって、ドヤ顔してたくせに、そんな悪者の格好になっちまって。そんなお前が今さらエビルスアークに立てつこうとしているんじゃねえよ」

「うっ、うろう……誰のせいで、こんな……あうっ、んっ、あ、あああ……私はっ、私はあああ……!」

忌まわしい過去を呼び起こされ、頭痛が襲ってきた。しかし、その痛みを遥かに上回る快感が、私を包んでいる。

「ほら、カメラで撮ってるから、画面の向こうにいる、お前に期待していた人たちに謝ったらどうだ？」

カメラが私の顔を至近距離で捉える。

「いやっ……撮らないで……こんな、えっちになった私を、見ないでええええっ！」

私は顔を背けたが、カメラはしつこく追従してきた。悪に身を堕とし、淫らに喘いでいる私の姿が、映像として記録されてしまっている。

私は手を伸ばしてカメラのレンズを塞ごうとしたが、周囲の男に手首を掴まれ、僅かな抵抗すら封じられてしまった。

「あうっ、いやああああっ……あああ……じゅぶじゅぶ、激しい……っ、んあああああっ！ ダメっ、このままだと、イっちゃう……撮られてるのに、ああああっ、イっちゃうよお……！」

「ほら、イクんなら、カメラに向かって謝りながらしろよ。快楽に負けて悪者になってごめんなさいってな！」

「くうううっ、いやっ、いやあああっ！ もうやめてっ！ 撮るの、やめてええええええっ！」

「おらあっ！ イけっ！ イっちまえ！ 謝りながらイけっ！」

「あああああっ！！ ごめんなさい、んああああっ！ イくっ！ ごめんなさ——んんんんんっ！！ うあああああああああっ！！」

私は絶頂した。カメラの前で、髪を振り乱し、涙や唾液をまき散らしながら、謝罪の言葉を口にして、絶頂した。

「あああああ……うっ、あああああ……」
ひどく惨めな気分だった。

（どうして、こんな、ことに……）

魔法少女になって、悪と戦って、街のみんなを守る。それだけだったはずなのに。褒められて、感謝されて、でも正体は明かせませんって笑って、そんな世界を作りたかったのに。

「ははは！ 派手にイキやがったぜ！」

「淫乱魔法少女は犯されて感じる変態だもんなあ！」

「もっともっとイかせてやろうぜ！」

今は、男たちに身体だけでなく心まで蹂躪されている。

絶頂による魔力の放出に合わせて、大粒の涙が瞳から零れ落ちた。

「ううう……ぐっ、ううう……」

「今のうちに泣いておけよ。すぐに泣く余裕もない身体にしてやるからな」

じゅちゅっ！ じゅちゅっ！ じゅちゅっ！

サングラスの男が再び腰を振る始める。悔しくても、悲しくても、抽送により私の身体は淫らに反応してしまう。

「あっ、んああっ、んっ、あううううっ！ そんな、奥まで、じゅぶじゅぶって……んああああああっ！」

背後の男が私の乳首を指先で小刻みに弾き続けていた。胸への刺激と膣内への刺激が連動し合って、私の性感を爆発的に高めていく。

「ああ、待ちきれないですよ。早く交代してください」
周囲の男がサングラスの男を急かす。

「待ちきれないなら上の穴を使えよ。遊ばせておくな」

「仕方ないですね。口で我慢します」

1本のペニスがぐいっと私の眼前に突き出された。

「いやっ……こんなの、啜えたくないっ！」

私は首を振ってそれを拒む。そんな私の顔を、サングラスの男が掴んだ。そして、低い声で私に語り掛ける。

「いいのか？ お前はこれから、ここにいる全員に犯されるんだぞ？ 全部おまんこで相手するつもりか？ そうなったら、お前のおまんこ、使い物にならなくなるだろうな。時間もどれくらいかかるか分かったもんじゃない」

「ひっ……それは……」

「嫌ならさっさと啜えろ。口を使って、射精させるんだよ。そうしたら、おまんこで相手する数や、かかる時間は半分になる。簡単な話だよなあ」

「ううう……」

男の言うとおり、簡単な話だった。私が望む望まないではなく、そうしなければならぬことを私は理解した。

私は口を開く。

「はうっ、むっ、ちゅぐうっ……」

大きな亀頭を頬張る。そのペニスは媚薬ローションにまみれており、私の口の中にドロドロの液体が絡みついた。媚薬の効果により、口の中までもが、じいんと熱くなる。

「んっ、ちゅじゅるっ、ぐむむう……じゅりゅぐっ……」

「おお、いい舌使いだぜ」

「なんだ？ シャーリー、前はフェラ下手だったのに、どこで習ったんだ？ 口まで淫乱になったのかよ」

「ひあうっ、んっ、ちゅ、むぐりゅう……ぶりゅっ、んむっ、んぎゅう……!!」

(これは……苗床の触手に、何度も口を犯されて……それで……)

エビルス・シャーリーとしてエビルスアークに協力していた頃、私は毎日のように触手の苗床に入り、魔力を提供してきた。数えきれないほどの触手を啜えこんだ経験が、無意識に目の前のペニスを啜える動作に繋がってしまっている。

「よし！ もう一度派手にイかせてやる！」

じゅぐっ！ じゅぐっ！ じゅぐっ！

ペニスの抽送が勢いを増した。

「ひゅぶるむっ！ んんぐうう！ ひゅむっ、ひゅめひっ……っぶ、ちゅぐう……んっ、じゅぐ、れむう……っぐうううううっ!!」

腔内のペニスが大きく脈打っている。サングラスの男の射精が近いのだ。
加速する抽送に、私の性感も強引に引き上げられ、絶頂が近づく。

「んじゅっ！ ぐっ！ ぶるぐううっ！ むびゅりゅっ！ んぐっ！ むっ、ちゅりゅううううっ！」

「出すぞ！ おらあああああっ!!」

びゅるるるっ！
膣内に熱い液体が勢いよく噴射された。
「ぶぐっ！ むっ！ ぐりゅうううっ!!」
さらに、口内のペニスが白濁液をまき散らし、私の口元や胸元を白く塗りつぶす。
「ひゅくうううううううっ!!」
同時に、私も絶頂へと至った。頭の中や視界が真っ白になる。それはまるで、精液により視界が塗りつぶされてしまったかのような感覚だった。
「ぐぐっ……じゅぐっ……ぶはあ……はあ……がふっ！」
「ほっ……あ……ああ……」
「……」



欲望を吐き出した2本のペニスが私から引き抜かれる。

……まだ2本。今この空間には、勃起したペニスがあと50本以上はある。

(私、また、輪姦されるんだ……)

男たちに群がられ、もみくちゃにされ、何度も何度も代わる代わる犯された、輪姦の記憶。

それは忘れてしまいたいものだったが、過敏になりすぎた私の身体は、その記憶を思い出し、激しく疼いてしまっている。今、次のペニスに挿入されたら、私はただ、喘ぎ声を出し続けるだけの雌に墮とされてしまうだろう。

「……」

だが、次の男はやってこなかった。目の前には私を覗き込むサングラスの男と、カメラ

を構える男が並んで立っている。

「どうだ？ 気持ちよかったか、シャーリー？」

「……気持ち……気持ち……ううう……」

気持ちよくなっていない、と虚勢を張りたかった。だが、身体が疼いて疼いて仕方がなくなっている自分を、もう誤魔化し切れない。

（気持ちよかったよお……もっと、気持ちよく、してほしい……）

墮ちるところまで墮ちてしまった、と思った。身体をいくら汚されても、心までは汚されない。そんな気概を持って凌辱に耐えていた小日向沙織はもういない。

身も心も、快楽に支配された哀れな雌が、ここにいる。

「なあ、シャーリー。1つ相談なんだが」

「え……？」

「今撮影している映像。AVとして広く一般に流通させたいんだわ。だがそうするためには、いろいろと審査があつてな。レイプものでも、演技じゃなくて、本当のレイプの場合、表では発売できないんだよ。だから……」

サングラスの男が顔を近づけ、耳元で囁く。

「お前を犯しているのは、合意の上だということにしてほしいんだ」

「な、っ……！」

（合意……？ エアガンで撃って、強制的に連れてきて、既に一回無理やり犯しているのに……今さら合意って……!?）

私は激しい怒りを覚えた。私の怒りに気づいていないのか、それとも気づいていて無視しているのか、サングラスの男はにやにや笑ったままだ。

「難しいことじゃない。カメラの前で、『私を犯してください』って、言ってくればそれでいい。合意成立だ」

「そんな、こと……言えるわけじゃない……！」

いくら無理やり犯されて感じているとしても、私自身がそれを望んでいるなんてこと、口に出せるわけがない。カメラの前で記録として残る形でならなおさらだ。

「ほう。嫌なのか？ もし合意が得られない場合は、この集まりは解散だ。これ以上お前に何もしない。だが、合意してくれるなら、きっちりお前を気持ちよくさせてやる。さあ、どうする？」

願ってもない話だ。私がここで合意しなければ、もう犯されることはない。

周囲の男たちに、きっぱり宣言してやろう。私は犯されたくなんかないって。

「私は絶対に合意なんか——」

どくん！

言い切る前に、身体の奥底が大きく疼いた。

身体が熱くてしかたがない。このまま終わってしまったら、誰がこの疼きを鎮めるというのだろうか。自慰程度の刺激で、満足できるとは思えない。

（大勢に、もみくちゃにされたら、とっても気持ちいだろうな……）

そう考えてしまった。その想像は、もう止まらない。ここで彼らに犯されることで得られるであろう快感を考えると、そくそくと身体が震えだす。

「私は……私は……」

早乙女さんの顔が脳裏に浮かぶ。私は、彼女に救われた身だ。彼女が危険を冒してまで救う価値のある人間だと、示さなければならぬ。

アルフェリカさんの顔が脳裏に浮かぶ。強く気高い彼女は、自らを犠牲にして私たちを逃がそうとしてくれた。その想いを、無駄にしたいけない。

「どうした？ 合意するのか、しないのか、どっちなんだ？」

「……」

（2人とも、ごめん、なさいっ……私、もう、我慢できないっ……！ 気持ちよく、なりたいのおっ……）

私は両の瞳からボロボロと涙を流しながら口を開いた。

「犯して、ください……」

「もっと大きな声で！」

「わだしをっ！ 犯してくださいいいいっ！！ うああああああっ！！」

言った。言ってしまった。

これでもう、言い訳ができない。私は自ら快感を求める淫乱で、大勢に犯されることを望む変態なのだ。

「そうか……じゃあ、ここから先は合意の上だ。お前たち！ 好きに犯せ！」

「よおおおし！ 待ってました！」

ぞじゅっ！

周囲の男が群がってきて、膣内と口内にペニスがねじ込まれた。

これはもう凌辱でも輪姦でもない……合意の上の、乱交セックス――

じゅっちゅ！

じゅっちゅ！ じゅっちゅ！

男たちのペニスが、膣内と口内を激しく決る。胸への刺激も継続され、快感が瞬間に膨れ上がる。

「んぶるぐっ！ んちゅっ！ ぐぐむう、れじゅっ……んっ、ぐ、ぶりゅむう……んんんっ！ ぐちゅっ、れう……むぶぐむうううっ！！ ひじゅっ！ んぐっ！ ひゅむううううううううっ！！」

ううううううううっ！！

絶頂した。

魔力が失われていくが、仕方ないことだと思った。

ぞぶっ！ じゅぐっ！ ぞぶっ！ じゅぐっ！

ローションが敷かれたプールの床に寝かされ、激しく腰を打ち付けられている。両手を頭上で床に押し付けられ、抵抗を封じられた状態で、身体中を男たちの手が這いまわっている。

「んいあああああっ！ あっ！ んんっ！ くあああああっ！ いっぺんに撫でられたら……くひゅうううっ！ 身体中、敏感にっ！ ああああああっ！ お腹、ずんずん響いて……激しひっ……あ、あああ、あああああっ！ イくっ！ イぐううううっ！！

イっちやううううううううっ！！」

絶頂した。

魔力が失われていたが、私は気付かないフリをした。

ぐっちゃー！　ぐっちゃー！　ぐっちゃー！　ぐっちゃー！

私は四つん這いにさせられ前後からペニスを突かれていた。激しい突き入れにより、挟まれた身体が軋み、全身に付着した媚薬ローションが周囲に飛び散っている。

「はぐむうう！　んっ、じゅっ、ぐぶっ、じゅりゅうう……むぐっ！　んっ！　んみゅううっ！　んっ、んんっ、むぐっ、ぶぐうううっ！　んんっ！　んじゅっ！　んんっ——んんんんっ!!」

絶頂した。

魔力が失われることを、私は気にしなかった。

じゅぶぐっ！　じゅぶぐっ！　じゅぶぐっ！

寝そべった男の上に重なるようにして、仰向けで寝かされた。下にいる男に激しく膣内を突かれている。無防備な私の身体を、周囲の男たちが愛撫していた。クリトリスにも指が這い、激しい刺激が私に襲い掛かる。

「あああああっ！　ひうっ！　んんっ！　クリトリス、弄られたら……あああっ！　そんなたくさん、触らないでえ……ああああっ！　んんっ、ひぐっ!?　あ……出てるう……熱いの、お腹の中に……あ——ああ——イっちゃうう……私も、イクううううっ！　せーえき出されながら、イクっ！　イクうううううううううっ!!」

絶頂した。

魔力が失われていたが、もはやどうでもいいことだった。

「んぐっ、ちゅぶっ……んっ……ぐぶっ、ちゅれう……」

私は男の股の上に跨っていた。下からの激しい突き上げにより、脳が蕩けるほどの快感を得ている。

「じゅぐっ、れむっ……んっ、んんっ……んぐうう……」

口には別の男のペニスを咥え、さらに手でも、2本のペニスをしこいでいた。

カメラはずっと私を捉え続けている。一度に4本のペニスを相手にする姿は、とても淫乱に映っていることだろう。これはこの場を早く終わらせるためのものか、それとも、自らペニスを欲してしまった結果なのか、私にも分からない。

全身は、男たちからまき散らされた欲望の白濁液で真っ白に染まっていた。身体に塗り込まれた媚薬ローションと混ざり合って、衣装をドロドロに汚している。

「ひゅぐっ！　んんぐううっ！　んっ！　ひゅぐううううううううっ!!」

びくん！

絶頂により、男の上で私の身体が大きく跳ね上がった。股間から脳天までを快感が突き抜け、私の意識を激しく揺さぶる。

「んぐう……んんんっ!?」

ぶしゃああああ！

私がしこいでいたペニスの1本が、精液をまき散らした。噴射された白濁液が私の頬を打ち、肩や胸元を汚していく。

それに呼応するように、膣内、口内、そしてもう片方の手でしごいていたペニスも、順番に射精していく。

[illegible]

大量の白濁液が宙を舞った。膣内でまき散らされた精液が膣奥を叩き、その刺激で性感が高められていく。

「がはっ……ごほっ……く、うああ……あつ！　んあああああつ！　ダメっ！　イツちゃ
うっ！　せーえき出された刺激で……あ、んあああああつ！！　イー——くっ——イぐっ！
イツじゃうのおおおおっ！！」

連続での絶頂。身体の痙攣が止まらない。

「う……あ……ああ……」

4人の男たちが私から離れていく。ぴちゃり、と、私の身体は媚薬ローションの中に倒れた。

「はあ……はあ……ほっ、ぐ……あ……はあ……はあ……」

何人に犯され、何回絶頂したろうか。30人目くらいから意識が朦朧とし初め、まともな数を数えられなくなっていた。

（でも、最初いたのは50人くらいだったはずだから、もうだいぶ相手をして、残り少なくなっているはず……）

私は残っている男の数を確認すべく、周囲に視線を送る。

「……」

そして、絶望した。プールの中、外を問わず、いまだに数えきれないほどの男たちが待機している。その数は、50人どころではない。もっといる。

こうしている間にも、プールの入り口から男たちが入ってきていた。私を犯したい男の数は、まだ増え続けているのだ。

「あ……ああ……そんな……まだ、こんなに、たくさん……」

恐怖に怯える私の傍に、サングラスの男がやってきた。

「ここに来ればお前を犯せるってことは、既に拡散済みだ。だがな、まだこんな数じゃねえぞ。部屋の外にも、建物の廊下にも、外の道路にも、順番待ちの列が続いているんだ。」

「お前、これから何百人に犯されるんだろうな。俺にも予想つかねえぜ」

そう言ってケタケタと笑うサングラスの男。嘘を言っているようには見えない。

「そんなの、ダメ……これ以上されたら……私、壊れちゃう……！」

「いいねえ、その演技。ぐっくるぜ」

「演技じゃ、ないっ……！」

「何言ってるんだ？ これは合意の上の行為なんだぜ？ 今さら嫌だとか言わないよな」

「だって……あの時は……こんなにいるなんて……」

「はいはい。お前の演技がうまいことは分かったよ。お前ら、時間が惜しい。さっさと犯せ」

周囲の男たちが私に群がってくる。

「あ……いやあ……いやああああああああああつ!!」

私の叫び声は、私を囲む男達に遮られて、遠くまでは響かなかった。

「うっ……はあ、はあ……」

身体が、自分の身体じゃないみたいになって、どれくらいになるのでしょうか。

ルカンダに、描かれた場所が性感帯と同じ感度になる紋様を、身体中のあらゆる場所に付与されてから、常に激しい疼きが全身を襲っていました。お腹に描かれた感度が100倍になる紋様と合わさって、小さな身じろぎ一つでも大きな快感を伴ってしまいます。

今こうして、バスの座席に横になっている状態でも、座席と擦れる背中が快感を生み出し続けていました。

（2人は、どうなったのでしょうか……）

捕まった私を助けようとしたために、小日向さんとアルフェリカ、彼女たちもまた、エビルスアークに捕らえられてしまいました。そして今もお、こんな身体で足手まといの私を助けようとしてくれます。

2人が酷い目に遭っているかもしれない。そう思うと、居ても立っても居られない気持ちになります。ですが、満足に走ることもできない私が行っても、さらに迷惑をかけてしまうのは明らかでした。

私はなんて無力なのでしょう。こうやって、1人隠れていることしかできないなんて

「いたぞ！ ノーブル・ローズだ！」

「!!」

男の声に、私ははっとしました。

（見つかってしまった……!）

何人かの男たちが、いつの間にかバスの中に入り込んでいました。座席に寝ている私を発見した男の人と目が合います。

「くっ……逃げないと……!」

「おっと！ 逃がすかよ！」

慌てて立ち上がった私の腕を、男の1人が乱暴に掴みました。

「嫌っ！ 離してください！」

「暴れるなよ。じきにみんな来るからな」

「いやああ……私をどうするつもりですか？」

「どうするって、決まってるだろ、なあ？」

男は隣の男に目配せをして、にやにやと笑いました。いやらしい視線が、私の下半身に向けられています。

そうこうしているうちに、バスの中に次々と男の人が乗り込んできました。

「まさか……みんな、私を辱めるつもりなのですか……?」

「そういうルールだから。悪く思うなよ」

「そんなの、嫌ですっ！ あなたたち、エビルスアークに味方なんて、してはいけません！」

「うるせえなあ。お前たち魔法少女がもっとしっかりしていれば、この街はこんなことになっていないんだよ。責任を取って、俺たちに犯されろ」

「何を言って……きゃああっ！」

私はバスの通路の中央付近まで引っ張られました。

「おい、これで拘束しろ」

男が懐から取り出した金属製の物体。それは手錠でした。4つの手錠が、男の手の中でじゃらじゃらと音を立てています。

「おっ、いいもの持ってるじゃねえか。よし！」

「それは……嫌っ！ そんなもの、付けないでくださいっ！ 離してっ！」

4本の手錠が、私の両手と両足にかけられました。手に付けられた手錠の反対側は、天井から下がっている吊革に、足に付けられた手錠の反対側は、通路を挟んで両側の座席の脚に、それぞれ取り付けられます。

私はバスの中で、大きく両手両足を開いた状態で拘束されてしまいました。

「こんなの、嫌ですっ……！ 早く外してください！」

私は両手両足を力を籠めてみましたが、ステッキを手にしていない状態では、頑丈な金属の枷を破壊することはできそうにありませんでした。

このままでは、抵抗することすらできずに、男の人たちに好き勝手にされてしまいます。

「へへへ。あのノーフル・ローズを犯せる日が来るなんてな」

「俺、あなたのファンなんだよ。エビルズアークと戦っているところ、結構見てたんだぜ」

「はあ、はあ。ノーフル・ローズのおっぱいいただき！」

1人の男が、背後から抱きついてきて、コスチューム越しに私の胸を揉み始めました。

「ダメっ！ どこ触って……んきゅうっ！ ダメ、です……そんなに激しく揉んでは……んああああっ……！」

感覚が100倍になっている身体は、胸を揉まれただけで過敏に反応してしまいました。甘く、切なさに伴う快感が、胸から全身にじんわりと広がっていきます。

「おしとやかだと思っていたのに、胸の感覚、高いじゃねえか。普段から誰かに揉ませているのか？」

「違い、ますっ……そんなこと、させていません……んんっ！」

「だったら元から感じるってことか？ 見た目と違って、とんだドスケベ女だぜ」

「あうっ……これは、感覚を上げられて……ひやあああああっ！」

男の手が乱暴にブラウスを掴むと、胸の中央で左右に引き裂きました。私の乳房が、両方とも、男たちの前に晒されてしまいます。

「ひゅう！ いい形してるねえ！」

「やめてくださいっ！ 見ないでっ！ んひいっ！ そんな、直接触っちゃ、ダメ……ひううっ!? 乳首、摘ままないでくださいっ……あっ、んあああああっ……！」

乳首を弄られ、激しい快感が巻き起こりました。ずっと快感を我慢してきた反動が出てしまっているのかもしれない。

「くっ……やめて、ください……もう、やめて……」

「ところで、身体中にある、このピンク色の模様はなんだ？」

男の1人が、私の身体に描かれた紋様の1つに触れました。

「ダメっ！ そこは……んひいひいひいっ!!」

身体中を、快感が突き抜けました。紋様が描かれた場所は、性感帯と同じ感覚になっ

います。つまりそこを撫でられるということは、膣の中を撫でられていることと同義なのです。その刺激が100倍に増幅され、私の身体は大きく揺れました。

「なんだなんだ。この場所を触ると、すげえ反応するぞ」

「それ、体中に描かれているな。こっちも触ってみるか」

「俺も触ってみる！」

男たちの手が、一斉に私へと伸ばされました。

「……!! んんっ! んあああああああっ!!」

複数の紋様を同時に撫でられ、私は背中を仰け反らせて悶えました。それほどに強烈な快感が生み出されたのです。

「すげえ反応だな」

「これ、身体中に描かれているな。20個くらいあるぞ」

「同時に触ったら、どんな反応するかな」

男たちの恐ろしい企みに、私は青ざめました。

「ダメ……ダメですっ……やめてください……! そんなことしたら、私、耐えられません……!」

私はやめるよう男たちに言いました。しかし、彼らは私の言葉を無視して、

「じゃあ、合図で一斉に触るぞ」

「せーの!」

20本の腕が、同時に私の紋様を触りました。

「くう——ひう——あ……あ……んあああああああああああっ!! っあああああああああああああっ!!」

全方位からの快感の暴風に襲われ、私は絶頂しました。1回ではありません。3、4回分の絶頂が同時にやってきて、私は断続的に意識を失います。

びちゃあ、と、股間から愛液が吹き出し、バスの床を濡らしました。

「あ……ああ……う……うあ……」

私は口からだらしなく舌先を覗かせながら、ぐったりと首を垂れました。そんな私を見て、男の人たちは嬉しそうに騒ぎ立てます。

「なんだ今の! すんげえエロい!」

「どんな体してんだよ。触られただけでイくなんでよ」

「ってかノーパンかよ。魔法少女って露出狂だったんだな」

「ふひひひ。もう我慢できないぜ」

私の背後にいた男が、ベルトをカチャカチャと弄っています。ズボンを下ろし、局部を露出させたかと思うと、

「おらあああっ!」

膣内に、勢いよくペニスを突き入れました。

「ひうううっ!! あ……入ってますう……男の人のおちんちんが、私の中に……ダメっ……ダメですっ……抜いてください……!」

触手やパイオ兵に犯されたことはあっても、人間のペニスを挿入されるのは、これが初めてです。敵に犯されるならまだしも、これまで守ってきた人たちに犯されるのは耐えがたい苦痛を伴いました。

じゅっちゅ！　じゅっちゅ！　じゅっちゅ！

しかし、ペニスの抽送が始まると、その苦痛は快感に上書きされてしまいました。

「んあっ！　動かないで、くださいっ……あああ、奥まで……いやああ……あつ、んあつ、く、あ、あああああ……！」

背後にいる男は私の腰をがっちり掴み、勢いよく腰を振っています。ばん、ばん、という肉と肉がぶつかる音とともに、ペニスが膣内を奥まで抉りました。

性感を100倍にまで引き上げられたこの身体は、乱暴な突き入れにも淫らに反応してしまいます。

「うおお。すげえ気持ちいい。まさかあのノーブル・ローズを犯せる日が来るなんて！」
「いやっ！　んんっ！　もうやめて、くださいっ……！　こんなことで、気持ちよくなんか、なりたく……んいいいいっ！」

「おおっ！　ノーブル・ローズが、俺のチンポで感じているぞ！　うおおおおっ！」

「んあっ！　激しく、しないでっ、んんあああっ！　ダメっ！　ダメえええええっ！！」

「もう我慢できない！　出るうううっ！」

男が一際大きく、ペニスを突き入れました。

「それはダメですうううっ！　中に出すのは、ダメえええええええええっ！！」

どしゃあああああっ！！

体内に液体を流し込まれる感覚に、おぞましさを感じます。しかし、精液が膣内を流れる刺激すら、今の私にとっては大きな快感に変わってしまいます。

膨れ上がった快感が、弾けました。

「んあああああっ！　ダメっ！　イクっ！　イきますっ！　んんんっ！　あっ！　イっちゃいますうううっ！！」

私の身体がピクンと跳ね上がりました。手錠と繋がれた吊革が限界まで引つ張られ、ぎしぎしという音を立てています。

感度が高まった状態での絶頂による快感は、私の身体の隅々まで行き渡りました。

（気持ち、いいです……）

いけないと分かっているながらも、身体の悦びを否定することはできません。私は絶頂の余韻で身体を小刻みに震わせながら、体内に残る快感の残滓を味わっていました。

「ふう。気持ちよかった」

「くひいいんっ！」

するとペニスが引き抜かれ。股間からぼたぼたと精液が垂れ落ちます。既に床に溜まっていた私の愛液と混ざり合って、淫猥な模様を描きました。

「はあ……はあ……はあ……んっ……はあ……」

私は唾液が滴ることも厭わずに、大きく口を開けて呼吸を繰り返しました。こうでもしないと、ばくばくと高鳴る心臓が張り裂けてしまうと思ったからです。

「おっ？　なにか光ってるぞ？」

そんな私の口の中を、1人の男の人が覗き込みました。私の舌に描かれている紋様を見つけたのです。

口の中にあるこの紋様のせいで、ものを食べるときだけでなく、唾を飲み込むときさえ、快感を覚えるようになっていました。

「なんだこれ？」

突然その男が、私の口の中に指を入れ、舌を触りました。

「っれうううっ!! んんっ!! っぶうううっ!!」

性感帯を撫でられた刺激が100倍に増幅され、びくんと身体が跳ね上がります。

「おいおい。舌を触ったくらいで変な声出すなよ」

「舌でも感じるっか? ほんと淫乱だな」

「あーあ。ノーブル・ローズって清純だと思ってたのに、なんだかがっかりだよ」

男たちの言葉を気にしている余裕はありません。指先がぐくくと舌を撫でるたびに、

快感が駆け巡っていました。

思わずその指を噛んでしまいましたが、快感により顎に力が入らず、甘噛みになります。唾液がまるで愛液のように溢れ出し、緩んだ口元からだらりと垂れ落ちました。

「あぶぐっ! んっ、じゅぐりゅう! むれう、っ、ぶぐううっ!」

「これが気持ちいいのか? ああ?」

3本の指が口内に挿し込まれ、舌を愛撫しています。その激しい動きに、性感がどんどん膨れ上がり、やがて――

「ぶっ、む……ぐじゅりゅうううううっ!!」

絶頂、してしまいました。あろうことか私は、舌を触られただけで絶頂したのです。

「舌でいくとか、もう何でもありだな」

「よし、どんどん犯して、どんどんイかせてやろうぜ」

男たちが一斉に私に掴みかかりました。

「やめっ……ダメで――つくいいいいいいっ!」

すじゅちゅっ!

背後から別のペニスが挿入されました。ぐじゅぐじゅと、濡れそぼった私の秘所がかき混ぜられています。

同時に、周囲から伸びた手が私の胸を掴み、乱暴に揉みだきました。男の握力によって、乳房の形がぐにゅぐにゅと歪んでいます。

そして、別の男の指先が、クリトリスに触れた時、

「あああああっ! イくっ! イきますううううっ!!」

私は絶頂に達しました。膣内、胸、クリトリスへの刺激が重なり、100倍に増幅され、頭がどうにかなりそうです。敏感になりすぎた身体は快感を我慢することなど許してくれません。多方向から責められたら、簡単に絶頂してしまいます。

「あ……ううう、っ、ぶぐううううっ!!」

じゅぶ! 再び口内に指が突き入れられました。

(ああ……お腹の中も、クリトリスも、胸も気持ちいいのに……口の中まで……ダメ、です……気持ちよすぎて……何も考えられなくなっちゃいます……)

「んっ! ちゅぐっ! んむぐうううっ! んっ! んんんんっ!! れうっ……ちゅぶ

……むりゅう……!」

そして、私への刺激はそれだけで終わりませんでした。

「敏感なところ、一斉に触ってやろうぜ」

「よっしゃあ! せーの!」

「ふみゅうううううううっ!!」
身体中にある、性感帯を増やす紋様が、再び一斉に愛撫されました。
絶頂のぎりぎりまで押し寄せていた快感が、一瞬で何十倍にも膨れ上がり、私を飲み込みます。



- 32 -

「ふぶうううっ!! んんんん——っ!!」
絶頂です。それも、何度も何度も。

右から左から、私の身体の中を絶頂の波が何度も行き来しました。頭の中も、目の前の視界も、真っ白に染まります。まるで無重力空間に投げ出されたような、そんな浮遊感に包まれました。

(気持ち、いい……気持ちいいですっ……!)

私の置かれている状況はすべて記憶から消え去り、頭の中を快感だけが埋め尽くしています。このままこの感覚に浸り続けていたいと思ってしまうしました。

「が……はあ……んんっ……あ……ああ……」

絶頂の波が過ぎ去っても、私は断続的にびくびくと痙攣を繰り返しています。

ようやく絶頂の余韻が過ぎ去ろうとした、その時、

「ぶちまけてやる!」

「んいいいっ!!」

膣内に精液がまき散らされました。その刺激で、までも軽く絶頂してしまいます。

「ふう。全身を触っている時、おまんこの中がすんげえ痙攣してて、超気持ちよかったぜ」

男は満足そうにつぶやきながら、私からペニスを引き抜きました。私の中に注がれた欲望の証が、再び地面に垂れ落ちます。

(うう……もう、こんな身体、嫌です……)

「へえ。そんなに気持ちいいのか。俺もやってみたいぜ」

すぐさま別の男の人が、私の背後に立ち、腰を掴みました。

「いやああああ……」

私のか細い声による抵抗は、まったくの無意味でした。

すりゆり！

勢いよくペニスが挿入され、膣壁を擦ると、また身体が快感に支配されてしまいます。

「んあっ！ んんっ！ もう、いやああああっ！ 気持ちよくなって、なりたくないのに

っ……ああああっ！ 奥まで突かれると……んんっ！ また、気持ちよく……んひひひいいっ！」

「さあみんな、ノーブル・ローズを触りまくってくれよ」

「いいぜ。おらああっ！」

「ダメっ！ ダメええええええっ！！ っぶぐううううっ！！」

胸、クリトリス、そして口の中を含んだすべての紋様が、男の手で刺激されました。この刺激による快感に、耐える術はありません。

何度も何度も、絶頂させられてしまいます。

「んんううううっ！！ ちゅぶっ！ じゅぐうううううううっ！！ ぶりゅみゅううううううううっ！！」

私は指で口を塞がれながら絶叫しました。

気持ちいいが飽和状態となり、断続的に私の意識を飛ばします。

(そんなに、触っちゃ、ダメ、ですっ……！ もう、やめてください……！ 私が、壊れちゃいますっ……！)

私が叫びながら絶頂を繰り返しても、男たちは愛撫を止めません。私の反応を楽しむような視線を向けながら、執拗に性感帯を弄ってきます。

「んん——っ！ んんっ！ ——っ！！」

「すげえ締め付けた！ 出るっ！」

「——じゅむっ!? ぶぐうううううううっ！！」

放たれた精液が膣内を埋め尽くしました。それも大きな快感をもたらす刺激となり、私の絶頂を連続させる要因の1つとなります。

(これ……ダメ……気持ちよすぎて……私……もう……ああああああっ！)

ぶっん！

頭の中で何かが千切れたような音が響き、私の全身から力が抜けました。

私の身体がどうなったのか、もう分かりません。今もまだ絶頂しているのか、気持ちいいのか、それすらも分からなくなりました。

「おい、ノーブル・ローズ？ ぐったりして動かなくなったぞ」

「いきすぎて壊れちゃったのか？」

「なんだよ。反応しないのはつまらないな」

「構うものか、気絶してたって俺はやるぜ」

ぞぶり！

じゅっちゅ！ じゅっちゅ！ じゅっちゅ！

腔内にペニスが挿入され、激しい抽送が行われています。

「あ……う……ああ…… ……あ……？ う……んっ……」

粘膜炎的な刺激により、私の身体が反応しています。私はぐったりと項垂れたまま、その責めを受け続けました。

ぐっちゅ！ ぐっちゅ！ ぐっちゅ！

「う…… ……あ……ぎゅう—— あ……うあ……」

じゅぐっ！ じゅぐっ！ じゅぐっ！

「……あ……ああ…… ———— うう…… ————」

ぞっじゅっ！ ぞっじゅっ！ ぞっじゅっ！

「…… ———— あ…… ————」

男たちは順番に私に挿入し、抽送し、射精していきます。

私はいったい、何人に犯されたのでしょうか。そしてこれから、何人に犯されるのでしょうか。

バスの中にいる男の人数は、減るところか増え続けていました。

（私は、もう、ここまでです……小日向さん、アルフェリカさん、ごめんなさい……）

私は心が壊れていくのを感じながら、静かに目を閉じました。

40

「たあああああっ！」

私は魔力を集中させ、雷に変化させると、全方位に向かって放った。

「ぐわああああ！」

一斉に飛びかかってきていた男たちが電撃を受け、地面に倒れる。

（この程度の魔法では、完全に無力化はできないか……）

公園の広場で、私は大勢の男たちに取り囲まれていた。全方位を隙間なく埋め尽くす男達の数は、正直数える気も起きないほどだ。

私はステッキなしでも使える魔法を駆使して、男たちの猛攻を防ぎ続けている。

「はあ、はあ……」

全方位に意識を向け続けているため、精神的な疲労も大きい。

いずれ私の体力は尽きる。そうならば、簡単に組み伏せられ、延々と凌辱を受け続けることになるだろう。

（私はどうなってもいい……2人が無事に逃げていてくれれば……）

ここで私が男たちを引き付けていることで、彼女たちへの注意を逸らすことができるな

ら、喜んで時間稼ぎをしよう。

「このっ……近寄るなっ!」

背後から距離を詰めていた数人の男性に電撃を放つ。電撃を受けた男性は痛みで飛び退いて、私から離れた。

「くそっ! 近づけねえ!」

「こっちはこれだけ数がいるんだ。大勢で押しつぶせばいけるだろ!」

「じゃあお前が先頭で行けよ。あいつの電撃、すげえ痛いんだぞ」

「簡単に犯せるって聞いていたのに、話が違っじゃないか」

男達に焦りが見える。いい兆候だった。そのまま手をこまねいてくれば、体力を回復させる時間を確保できる。

「あらあら。まだ犯せていなかったの?」

その時、頭上を影が横切った。翼を羽ばたかせて、私の頭上に浮かんでいるのは、四魔将のルカランダだ。

(くっ……厄介な奴が来てしまった……!)

ステッキがなくても、ただの人間相手なら問題ないが、彼女が相手となると話は別だ。まともに戦ったら勝ち目ははない。

「アルフェリカは、あなたたちの手には負えなかったようね」

「ルカランダさん! 力を貸してください!」

「仕方がないわねえ。でも、直接私が手を下すのは興ざめでしょう? だから、これを貸してあげる」

ルカランダが頭上で手を振ると、一人の男の前に小さな穴——空間と空間を繋ぐ門が出現した。穴の中から筒状の物体が飛び出し、地面に落下する。

「なんだこれ?」

男はその筒を拾い上げ、観察する。すると、その正体にすぐ気づいたようで、

「これは、オナホじゃないか!」
と叫んだ。

(オナホ……? 何だ、それは)

聞きなれない単語に私は眉を顰める。舞華や家政婦の彩音に教えてもらった言葉の中には、そのようなものはない。

「そのあなた。それを使って、オナニーしなさい」

「えっ? ここでですか?」

「そうよ。とっても面白いことが起こるから、やってみなさいな」

「でも、ここで脱ぐのは……」

「どうせアルフェリカを犯すつもりだったんだから、同じでしょ。そのオナホールの中にはローションが入っているから、そのまま使えるの。さあ、使ってみなさい」

「……分かりました」

男は下半身の衣服を脱ぐと、局部を露出させた。

「!?」

(何を、やっている……?)

突然の行為に、私は困惑する。

男は手にした筒を、局部付近へと移動させた。どうやら筒の片側には、細長い穴が開いているようだ。その穴に、ペニスの先端が向けられる。

（あの穴に、ペニスを入れて……自慰をするのか？）

器具の形状と男の行動を見るに、そうとしか想えなかった。しかしなぜルカンダは、あの男にそのようなことをさせるのだろうか。

そして、男が勢いよく、ペニスを筒の中に挿入した瞬間、予想外の衝撃が私を襲った。

「んっ！ んああああああっ！」

（これは……！ 膣の中にペニスを挿入された感覚が……!?）

膣壁を擦られる感触と、紋様によって増幅された快感が、膣内に沸き上がった。不意打ちの刺激に、私の膝がぐくぐくと揺れる。

（何が、どうなっている……?）

私は股間に指を当て、状態を確認するが、膣の中には何も挿入されていない。だが、ペニスが膣内にあるという感触は確かにある。

私の反応を見て、男達がどよめく。

「なんだ？ あいつがオナホにチンコ入れたら、アルフェリカちゃんが喘ぎ声をあげたぞ？」

「ふふふ。アルフェリカの膣内と、そのオナホールには、私の魔法がかかっている。そのオナホールに与えた刺激が、アルフェリカに与えられるのよ」

「まじか！ そいつはすげえ！」

男達から歓声が上がる。

（くっ……遠隔で刺激を与えてくるなんて……こんなの、防ぎようがない……!）

「いつの間に、そんな魔法を……!」

「あなたが知らないのは無理もないわ。だって、魔法をかけたのは時間を止めている間だから」

「こないやらしい魔法を私にけるなんて……卑劣な……!」

「ふふふ。悔しそうな顔をしちゃって。触れられていないのに、一方的に快感を送り込まれる気分はどう？ さあ、そのオナホールでどんどんおちんちんをしゃいて、アルフェリカを犯しなさい」

ルカンダの指示を受け、男性はオナホールを持つ手を上下に動かし、ペニスの出し入れを開始した。

「んがあああっ！ やめっ……くああああああっ！ 膣内を、ペニスが رفتたり来たり……んぐうううっ!!」

背筋を奔る強烈な快感に、私はその場に膝をついてしまう。必死に股間を押さえるが、遠隔で送り込まれる快感を、防ぐことはできない。

ショーツを身に着けていない股間から、ボタボタと愛液が零れ落ちていた。

「ダメっ……こんな、うあああああ……やめろ……そんなに激しく、動かすなああああっ！」

男性は腕の動きを加速させている。

実際に、ペニスと膣を結合させた状態での抽送は、腰を動かすという行為上、一定以上の速度は出ない。しかし、オナホールによる抽送は、手を動かすだけなので、腰を動かす

よりも何倍も速い速度でペニスが突き入れられていた。

経験したことがない速さでの抽送の刺激に、性感が無理やり高められていく。

「ああっ！ いやああっ！ こんな、ことでっ、んんっ！ あっ、ぐっ、んあああっ！ ダメっ！ ダメええええっ！」

「ほらほら！ アルフェリカがイきそうよ！ 盛大にイかせてあげなさい！」

「うおおおおっ!!」

「いやあああああっ!!」

秒間4〜5回の激しいストロークを受け、私の快感が弾けた。全身を浮遊感が包み、力が抜ける。

そこへ、

「うおっ！ 出るっ！」

男性がオナホールの中へ射精した。

「うっ!? んなああああああっ!!」

私の膣の中に射精されたわけではない。しかし膣の中に、液体が注ぎ込まれる感覚がある。精液の熱までも伝播しているのか、膣内の温度が高まっているように感じられた。

「うあ……出てる、ううう……あああ……」

私は絶頂の余韻の中、膣内に精液が流れる刺激に身を震わせた。絶頂により魔力が放出されていく。

「ふふふ。2人とも、派手にいったわね」

「くっ……このおっ……!」

いつまでも無防備に膝をついているわけにはいかない。私はふらつきながらもその場に立ち上がる。

「あら。まだがんばるつもり？ じゃあ、そうねえ。もうこれ、みんなに配っちゃうわね」

ルカンダが頭上で腕を振る。

（また、さっきの道具を出すつもりか……?）

その予想は当たっていると同時に外れていた。

確かに筒状の自慰器具は出現したが、その数は10や20ではない。

「なっ……こんなに、たくさん……?」

「オナホールを100個出現させたわ。もちろん、全部に私の魔法がかかっているわよ。

これが一度に使われたら、どうなるか、分かるわよねえ?」

あの器具が100個同時に使われるということは、私の膣に対し、100人が同時に挿入する感覚が与えられることになる。

「くううっ……そんなこと、されたら……」

「ふふふ。感覚が100倍になった身体で、100人に同時に犯されたら、単純計算で快感は1万倍ね。いまだかつて、これほどの快感を味わったことがある人間はいないでしょうね。喜ばさい」

「う……あ……やめろ……やめろ……!」

「さあお前たち！ アルフェリカを犯すと思って、それを使うのよ！」

男たちは下半身を露出させ、自慰器具を拾い上げる。そして、タイミングを計るかのようにつくりと、ペニスの先端を器具の穴部分に当てた。

「ひっ……やめ——」

「挿入しなさい！」

ルカンダの合図で、一斉にペニスを突き入れた。

「んぎひいいいいいいいいいっ!!」

すぽお!

すぶっ! ぐじゅっ! するじゅっ! すぐぶっ! すちゅうっ!

様々な挿入音が周囲から聞こえ、同時に私の膣中に挿入による刺激が巻き起こった。

100人分の挿入の刺激により、気付けば私は絶頂していた。

「んんああああああっ!! ああああ!! んんあああああ!!? んぎひいいいいいいいっ!!」

私は弾かれたように地面に倒れ、空を見上げながらぐくぐと身体を痙攣させた。

(何が、起こった……? こんなの、人間が受けていい刺激じゃないっ……!)

ふしゃああ、と、股間から愛液が飛び散る。粘膜への刺激が強すぎて、今の感覚が快感なのかどうかすら判別がつかない。

そして、100人の男達が、ペニスをしこきはじめた。

すちゅっ! ぐちゅっ! 「んがあああああっ!!」 そっ! ぐりゅっ! そっちい!

「がっ! ぐあああああっ!!」 そぶっ! ぐちゃっ! ごちゅっ! 「こんなの

っ! ダメえええええ!!」 じゅっ! じゅちゅっ! 「やめ——」 そぶぐっ! じゅ

ぐっ! ぐっちゃ! 「やめえ……」 そちゃっ! じゅっちゅ! 「やめてええええええ

ええええっ!!」 じゅぶううっ!

100人に同時に犯される感覚が、すべて紋様の力により100倍に増幅される。通常の1万倍の快感に襲われ、一瞬で私の身体は制御不能に陥った。

「イクうううううううううっ!!」

それは絶頂だったのだろうか。電撃を浴びせられたような衝撃が全身を駆け抜け、腰が大きく跳ねあがった。

頭がすぎすぎと痛みを発している。視界がホワイトアウトし、何も見えなくなった。

じゅっ! そじゅっ! じゅっちゅ!

器具を動かす音は続いている。

「ぎういああああああっ!! もうダメええええええええええっ!! ごわれりゅうっ!! 私ごわれじゅうううううううっ!! うあああああああああああっ!!」

私は身体を仰け反らせながら絶叫した。絶叫していなければ、自我が快感に飲み込まれてしまいそうだった。

「んあっ!! イぐっ! イっでりゅっ? イぐううううううっ!! 何回もイっでりゅの

おとおおおとおおおっ!!」

それは地獄のような責め苦だった。

100人の抽送はそれぞれ速度がランダムで、常に膣奥をペニスの先端が決り続けているような状態になっている。

膨大な魔力が放出されていく。快感が多すぎて、身体は1秒に1回以上の頻度で絶頂を繰り返していた。

「ダ、メ……もうダメええええええええええっ! やめでっ! やめえあああああああ

っ!!」

恥や外聞を気にする余裕はなかった。この責めを続けられたら、人間の精神は簡単に壊れてしまう。私は唾液をまき散らしながら、責めをやめるように懇願した。

しかし、

「出すぞ!」

「俺もだ!」

「うおおおっ!」

複数の男性が器具の中に射精した。精液が膣奥を叩く刺激が、いくつも巻き起こる。

「んっ……ぎいいいいいいいいっ!!」

抽送による刺激も続く中、射精の刺激をも味わうというのは、未知の体験だった。精液の熱が次々と私の膣内を焦がし、急速に体温を上昇させていく。

「あ……がっ……があああっ……!! ぐううう、んんん——っ!!」

ふしゃああ! どしゅうう! ひゅるるっ!!

次々と男たちが射精していく。

終わらない100人分の射精。実際に私の膣内に精が放たれているわけではないが、大量の精液がお腹の中に溜まっているような錯覚がある。

(ダメだ、これ……次から次へと気持ちよくて……意識が、保てない……)

「が——んっ——あ、ぐ、あ……」っ、おっ、おおおお……!!」

抽送の快感、射精の快感、もはやそれらの区別はつかない。ただ苦しいほどの快感が積み上げられていく。

絶頂が止まらない。魔力の流出も止まらない。

心臓がばくばくと高鳴り、腰がびくびくと震える。痙攣する身体では呼吸すらままならない。

「ルカンダさん! 俺にもオナホください!」

「いいわよ。まだまだあるから。でも、魔法でアルフェリカと繋げられるのは100個までだから、同時に渡すのは100個までにするわね」

「出てきた! ありがとうございます!」

誰かが射精すると、また新たな器具が出現し、男がそれに挿入する。私は常に100人から犯される状態になっていた。

「ひくっ、んあうううっ! イぐうう、ずっといっ……あうっ! ん——ぎひゅううううっ!!」

ぐじゅっ! すちゅっ! そぶっ! じゅっちゅ! ぐちゃっ!

100人分の抽送音が響き続ける。

1万倍の快感が身体中を暴れまわり、私の神経を直接撫てまわす。下腹部を中心に気持ちいいという感覚が溢れかえる一方、頭や首筋はすぎすぎと痛む。

「もう、んんっ! ダメえ……やめれっ! やめっ、やあああああああっ!!」

「ルカンダさん、もう出てこないってことは、100個出ちゃってるってことですか?」

「そうね。今100個使われているわ」

「そうですか。じゃあ、待つしかないですね」

「あら。まだ穴は1つ残っているじゃない」

ルカンダはそう言って、倒れる私を指さす。

「アルフェリカを直接犯せばいいのよ。今なら彼女、抵抗できないわよ」

「いいんですか！ よっしゃあー！」

1人の男が私の傍まで駆け寄ると、痙攣を続ける身体をうつ伏せにひっくり返す。

「ひくっ……やめ、ろ……今犯されたら……んぎゅうううううっ!!」

すちゅっ!

男が背後から私の腰を掴み、強引に引き寄せたことで、ペニスが膣の奥深くまで突き刺さる。

「んっ! がああっ! あっ、ひうっ! ひんっ! あ、いやあああああっ!」

100人による抽送は続いているが、実際に挿入された1本は、一際大きな存在感を私に与えた。男が腰を打ち付けると、快感がさらに膨れ上がる。

(ダメだ……されるがままで、抵抗できないっ……このまま続けられたら……快感以外のことを考えられない身体にされてしまっ……!)

「奥、突くなあ……はあああ……ぐっ、ああああああああっ!! あっ! イグっ! すっといってりゅっ! あああああっ!!」

じゅぶっ! じゅぶっ! じゅぶっ!

魔力がみるみる失われているが、気にかけている余裕はなかった。

「俺もがまんできねえ! 口を使うぞ!」

「だったら、こうしてやる」

背後から犯している男が、私の両手首を握り締め、ぐいっとな前に引き寄せる。

「あっ……ひあああああっ!」

私の上半身が引き上げられる。すると目の前に、むき出しになった男のペニスがあった。

「唾えろ!」

「やっ……っぶ、ぐうぶううううううっ!!」

髪の毛を乱暴に掴まれ、強引にペニスが口内に捻じ込まれた。太い棒が舌の上を滑り、唾液をぐちゃぐちゃにかき混ぜる。

ぐじゅっ! ぐじゅっ! ぐじゅっ!

じゅっぶ! じゅっぶ! じゅっぶ!

前後からの激しい突き入れ。ただでさえ、100人分の快感で意識が朦朧としているのに、さらなる刺激に私は翻弄される。

(こんなの、もう、ムリだ……壊れる……私が、壊されるっ……)

「じゅぐりゅむっ! ぐぶっ! っぶぐうううっ! んっ! ぐぶりゅううっ! む

っ! んんん——っ!!」

びくん! びくん!

連続での絶頂に、常に身体が痙攣している。

ぶしゃあ! どゅしゅう! びゅるるっ!

周囲の男たちが次々と射精していく。膣内を精液が暴れまわる感触が走るたびに私は絶頂した。

(気持ちいい……イクっ……気持ちいい……イってるっ……ああ……気持ち、いいっ……!)



「れじゅっ、むぐるぶっ！ ぬっ、ぶりゅっ、ぐむぐ！ ちゅぐっ！ んれむううっ！
んっ、ぐっ、むぐっ、むぎゅうううううっ……！」

快感の暴力の中、身体は意識を途切れさせようとしていたが、口内奥深くまでねじ込まれるペニスによって覚醒を強いられていた。

気絶してしまえばどんなに楽だろうか。脳内の神経が刻一刻とすり減っていく中、私は彼らによる責めが早く終わるよう、祈ることしかできない。

じゅっちゅ！ ぐじゅっぶ！ すぶぐっ！ 「ぶるぐうううっ！」 じゅっちゃ！ そっちゅ！ 「んぐっ！ ぐむりゅううっ!!」 そじゅっ！ じゅぐっ！ 「れじゅりゅうう……!! ん——っ!!」 ぐちゅっ！ ぎっちゅ！ 「びゆるむっ！ ひぎゅううううっ!!」

じゅちゅっ！ じゅぶっ！ 「ん——っ！ んぎゅうううううううううっ!!」

何度も何度も絶頂している。人間の身体がここまで連続で絶頂できるようにできているとは知らなかった。

だが、人間は殴られ続ければいつか死んでしまうのと同じで、絶頂を強制され続ければいつか限界が来ることは明らかだった。

（殺される……快感に、殺される……!!）
身体の震えが止まらない。自分の身体が自分のものでなくなっていくような感覚に、強い恐怖を覚える。

「さあ、あなたたち！ 一斉に射精しなさい！」
「おおおおっ！」

（やっ、やめろおおおおおおっ!!）

どしゅうっ！ ぶしゃああっ！ びゅるるっ！！

次々と射精が行われ、精液が飛び散る感覚が連続で送りつけられる。

「はむうううううっ！！ んんんっ！！ んぐううううううっ！！」

びくん！ びくん！ びくんっ！！

何度も何度も、私は絶頂した。そのたびに、身体が大きく跳ねあがる。

「膣中に出すぞ！」

「俺もだ！ 口で受け止めろ！」

「びゅぐりゅううううううっ！！」

ぶしゃあああっ！！

私の膣内と口内に、精液が放たれた。遠隔での射精の刺激と合わさって、本物の精液が膣奥を叩く。

「ぶぐううううっ！！ ん——っ！！ ぐりゅぶうううううっ！！」

（熱い……精液が、お腹の中で、暴れまわって……ああ……イってる……また、イってる……！）

するり……射精を終えた前後の二人が、膣と口からペニスを引き抜く。

「うあっ……がっ……ああ……」

手首の拘束を解かれ、私は顔から地面に崩れ落ちる。だらしなく垂れ下がった舌が土を舐めていたが、それを口内に戻す力すら残っていない。

「ううう……はうっ！ がっ！ あああ……！ まだ、でてりゅう……んんっ……もっ、やめれええっ……」

幾重にも重ねられた射精の刺激に、連続絶頂地獄が続いている。私はお尻だけを突き出した無様な姿で、身体をびくびくと震わせ続けた。

やがて、与えられる快感の量が少なくなっていく。多くの男が射精し、私を犯している人数が減っているのだ。

（ぐっ……早く、終わって……うう……）

刺激が少なくなるにつれ、絶頂の頻度も少なくなっていく。

そして、100人目が射精したのか、私への快感がびたりと止んだ。

「う……あ……ああ……？」

（終わった、のか……？）

地獄のような快樂責めから解放され、私は安堵した。

多くの魔力が失われてしまったが、まだある程度残っている。

（……！ 魔力が、残っている……ということは……）

「魔力を奪い尽くすまで、まだまだ犯すわよ。さあ、次の100個を出現させたから、まだ使っていない人は使いなさい」

私は、自分の魔力容量の大きさを呪った。舞華や沙織から託された貴重なものと分かっているにも、今すぐに魔力が全部なくなってくればいいのに、思わずにはいられなかった。

100人の男たちが、ルカンダが出現させた自慰器具を拾い上げる。

そして近くにいた2人の男が、私の前後に立つ。

「や……めろ……やめ……やめてえ……」

「私の合図で一斉に挿入するのよ。せーの！」
「やめ——」

すちゅうううっ!!

101本のペニスが私の膣内に、1本のペニスが私の口内に挿入された。

「ん……ぎゅ……ぐひゅうううううううっ!!」

102人による蹂躪が再開された。快感の暴力が、一斉に私に襲い掛かる。

ぐっちゃー! じゅっちゅー! 「ぶりゅぐっ! むぐひゅうううっ!」 じゅっちゅー! ぐ

じゅっ! 「れぶっ! じゅぐうううっ!」 そっちゅー! ぐちゃっ! そりゅっ! 「ん

んんっ!!」 につちゅー! じゅぐっ! じゅぶっ! 「ひゅむぐうううううううっ!!」

そちゅうううっ!!

(あ……ああ……いくっ……何度もイってるっ……私が、壊される……これ以上、耐えられそうにない……)

1万倍の快感に蝕まれ、私の意識が遠のいていく。

「ぐっ……ちゅぶっ……ぐ……むぐう……」

(もう、ダ、メ——)

102人に犯されながら、私の意識はそこで途切れた。

41

「あはっ、いたいた。ルカンダ! 呼ばれたから来たよ!」

ルカンダの後姿を見つけた私は、軽やかなステップで駆け寄った。

「遅いわよ、レスター」

そんな私に対して、ルカンダは冷たく返事をする。

何よ、せっかく来てあげたのに。

「もう、短気なんだから! ちゃんと来たんだからいいでしょ! ところで……」

私はルカンダの向こうに広がる光景を見て、うずうずした気分になった。

「面白いことになってるのね!」

日が落ちかけた夕方。公園の中にある野外舞台の上に、ルカンダと3人の魔法少女がいる。3人の魔法少女は、衣装をボロボロにし、精液にまみれた状態で、ぐったりと倒れている。

そして、舞台を取り囲む人間の群れ。みんな不安の表情を浮かべているから、ルカンダの部下みたいな、魔法少女が犯される姿を楽しみにしている連中じゃないみたい。

「この人たちはどうしたの?」

「パイオ兵を動員して、周囲の住人を集めてきたの。この世界の中では善良な奴らね。どちらかと言えば魔法少女の活躍に期待している人たちじゃないかしら」

「ふーん? んで、どうしてそんな人たちを連れて来たの?」

「あなた……アーク・デュラン様の命令を聞いていなかったの?」

ルカンダは呆れたような声を出す。少し頭がいいからって、すぐ私を見下すんだから。

「エビルズアークに忠誠を誓わない人たちを集めて、その前で魔法少女を犯して、思い知

らせるのよ。私たちに逆らう者は、もういないってことを」

「そうそう！ お父様、そんなこと言ってた！」

思い出した思い出した！ お父様だったら、とってもえげつないことを思いつくんだから。

私も面白いことを考えるのは好きだけど、お父様には敵わないな。

「私が魔法少女を犯せばいいの？」

「触手に犯させた方が、私たちの恐ろしさが伝わるだろうっていう、アーク・デュラン様の指示よ」

「なるほどね！ 人間やバイオ兵に犯させるより効果ありそう！」

「3人とも、残りの魔力が少ない状態になっているから、変身が解けるまで犯して頂戴」

「分かった！」

私は舞台の中央部、魔法少女たちが倒れている方へと向かう。

人間達は私の姿を見て、困惑していた。突然こんな可愛い女の子が現れたんだもの、しようがないよね！

「レスター、これを使って頂戴」

ルカンダが空間転移の魔法を唱えると、倒れる魔法少女たちの背後に、×印の形をした石造りの板が3つ出現した。重量のある板は舞台にめり込みながら直立しており、簡単には倒れそうにない。

なるほど。あれに魔法少女たちを磔にしろって言うのね？ ルカンダも結構分かっているじゃない。

「あはっ！ 久しぶりに、本気だしちゃおうっと！」

普段の私は人間の女の子の体に擬態している。でも、本来はお父様と同じ触手生命体なのだ。

1人を囂る時は手だけ触手にしたりするけれど、3人をいっぺんに辱めるなら、擬態を解く必要がある。

じゅる、じゅる、じゅる……

私が完全に触手の体に戻った時、観客からは驚きと恐怖の声が聞こえた。今まで着ていた服が、舞台上にはさりと落ちる。

「さあ、シャーリーちゃん、ローズちゃん、アルフェリカ！ たっぷり可愛がってあげるね！」

人の体はなくなっちゃったけど、触手と触手を擦って振動させることで、言葉を発することはできるのだ。

私は触手で彼女たちの身体を持ち上げると、ルカンダが設置した×印の板にあてがう。

魔法少女と板を束ねるように、ぐるぐると触手を巻き付けていく。

「やめ、てっ……」

「う、ああ……？」

「くっ……おろせっ……」

3人は抵抗のそぶりを見せたが、力はほとんど残っていないようだった。私にされるがままに、両手両足を大きく広げた状態で、板に磔になる。

「3人いっぺんに犯せるなんて、楽しみ！ さっそく挿れてあげるね！」

みんな衣装がボロボロになっていて、下着を穿いていないので、挿入を妨げるものはな

い。

「やめろお……もう、犯すなあ……うあああああつ！」
すぽお！

3人の膣内に触手を勢いよく捻じ込む。と同時に、触手を動かして膣内を蹂躪する。
じゅっちゅ！　じゅっちゅ！　じゅっちゅ！

ルカンダの紋様の効果で発情している3人の膣内は、ドロドロに濡れており、私の粘液と合わさって、触手の抽送はとってもスムーズだ。

膣内だけじゃなく、触手で全身を愛撫してあげることにする。胸にも触手を絡みつかせてあげたから、快感が増えているはずだね。

「あつ、んっ、ああああつ、もう、犯されるの、いやああ……やめてっ、んあつ、ああああつ……」

シャーリーちゃんは目に涙を浮かべながら、犯すのをやめるように言ってきた。そんなこと言われても、やめるわけないのに。でも、涙目で懇願する姿はそくそくしちゃう。私はもっと触手の抽送速度を速めてあげた。

「ひうっ、んっ！　ああああああつ！　いやあああつ、そんなに激しく、じゅぼじゅぼって……んああああつ……！」

前はあんなに嬉しそうに触手を咥えこんでいたのに、今は嫌がるなんて。またゆっくり調教して、あの頃みたいに「お姉さま」って呼ばせてあげるからね。

どんとん気持ちよくしてあげようっ！　しかし、シャーリーちゃんは反応がいいけど、ローズちゃんの反応はイマイチだ。

「う……あう……んっ……ひううう……」

びくっ、びくっ、可愛らしく身体を震わせるだけで、泣き叫んではくれない。やっぱりあれかな。前に苗床に入れた時に、ルカンダの紋様で身体中を性感帯にされた状態で、激しく犯しすぎたのが原因かな？　あれで壊れちゃったのだしたら、勿体ないことをしたなあ。

「はうっ……んっ、あ……ああ……」
もっと激しくすれば、反応するかな？

「あ……！　ああ……！　ダメ、ですっ……あ……う……うああ……」

ちよっと反応したけど。やっぱりダメみたい。基地に連れ帰ったら、しばらく様子見かなあ。まだローズちゃんが泣き叫ぶところを見たいから、しばらく大事にしておかないと。

そして、アルフェリカは生意気にも私を睨みつけている。そんな快樂漬けの状態なのに、まだ抵抗しようとしているの、健気すぎて張り切っちゃうな！

「んぐっ！　あああああつ……！　ひぐっ！　そんな、奥まで……いぎっ……あ……あああ……！」

「アルフェリカを犯すのは初めてだね！　向こうの世界ではあんなに強かったのに、どうしてこんな風になっちゃったの？」

「あぐっ、ああああ……これは、ルカンダに、紋様で、ぐううっ……感度を……ああああああつ！！」

触手を強めに突き入れただけで、まともにしゃべれなくなるんだから、だらしがないよね！　「レスター、アルフェリカはね。さっきまで100人に同時に犯されていたから、その程

度の刺激じゃ、満足しないわよ？」

「100人!? どうやったのそれ!」

「ふふふ。後で教えてあげるわ」

「楽しみ! じゃあ、100倍激しくして、満足させてあげる!」

じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ!

触手の抽送スビードを限界まで速める。アルフェリカの膣内から激しく愛液が飛び散り始めた。

「んあああああつ! やめつ、んんんつ! やめえええつ! そんなに激しいの……あ

つ! んつ! あああああああつ!!」

「うーん。100倍速くはできないなあ。もう1本挿れようか」

「ぎちい! アルフェリカの膣内を押し広げ、触手をもう1本、強引に捻じ込む。

「んぎあああああああつ!! そんな、2本なんて……入らな、ひいいいいつ!!」

「大丈夫大丈夫。ちゃんが入ってるよ。2本同時に動かせば、2倍気持ちいいよね!」

「あああああつ! 触手が、交互に……いぎつ! があああああつ! ダメつ! ダメえええええええつ!!」

じゅつぶ! そつちゅ! じゅぶつちゅ!

魔法少女を犯すのって、本当に楽しい!

シャーリーちゃんやローズちゃんへの出し入れも、もっと激しくしちゃおう! ついでに全身をもっと激しく撫でまわしちゃおう!

「あつ、んんつ! 激し……んあああああつ! んつ、くつ、あああああつ!」

「うあつ……あ……んつ、あ、あああ……やつ……うああ……!」

シャーリーちゃんとローズちゃんの身体は知り尽くしているから、もうイきそうになっているのが分かる。

アルフェリカも顔が薄けちゃってるから、もうすぐイくよね。

「あはっ! 3人とも気持ちよさそう! イっちゃっていいよ! 集まっているみんなに、イっちゃうところ、見せてあげて!」

周囲の人間達の視線が3人に注がれている。

みんなに見られていると言った瞬間、3人とも、イクのを我慢しようとしてる。健気で可愛い!

でも、そんなの長い間は我慢できないんだから。

じゅつちゅ! じゅつちゅ! じゅつちゅ!

執拗に、激しく3人の膣内を責め続ける。案の定、3人はすぐに限界を迎えた。

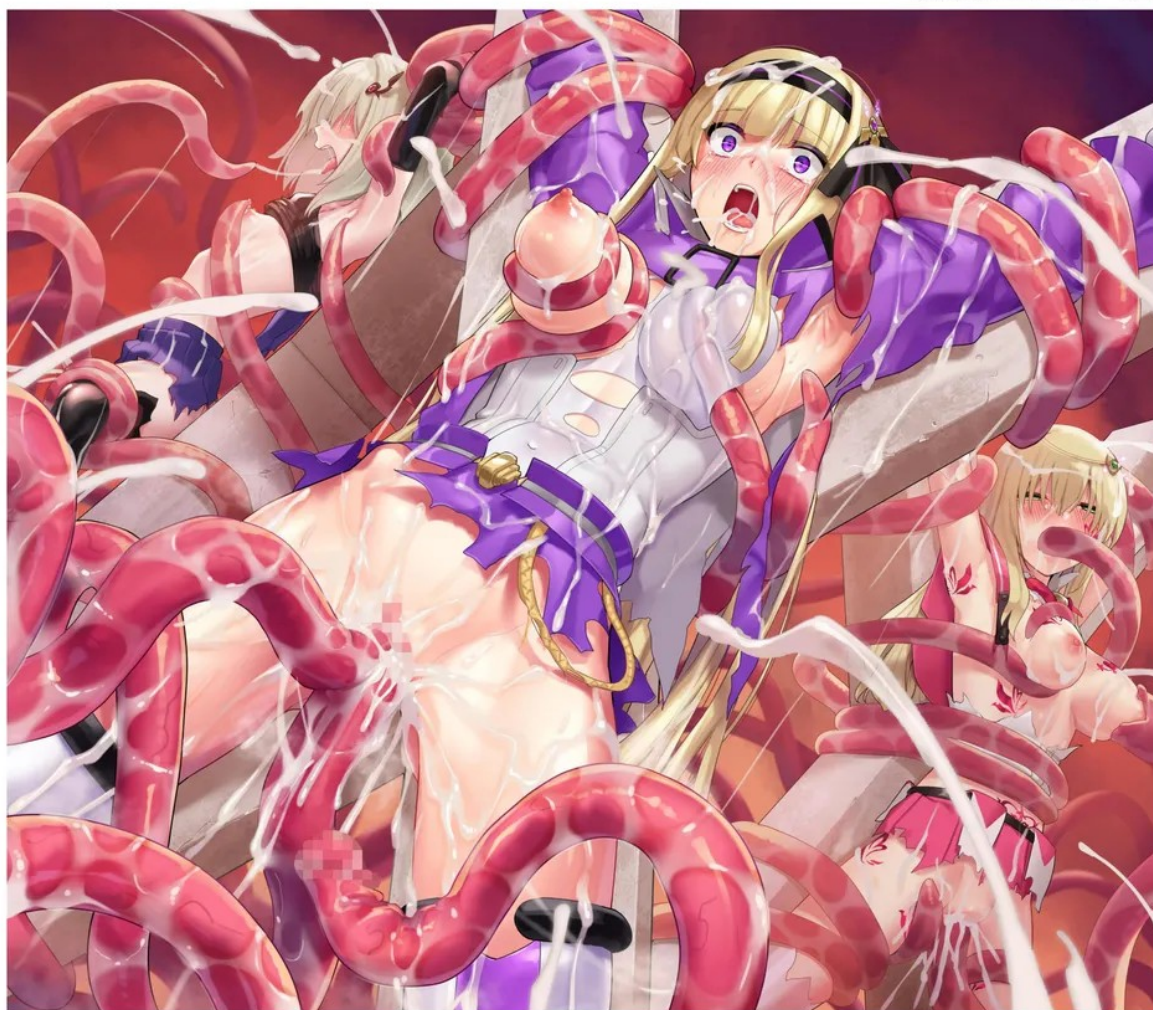
「んあああつ! ダメつ! イ、くつ……あああああつ! イっちゃううううつ!!」

「んつ、あ……んあつ、あ、あああああつ……イ——くつ、ううううつ……!」

「あぎつ! んつ、ぐああああああつ! やめつ……ああつ! イ、ぐううううつ……

……あああああああああつ!!」

3人の魔法少女は続けざまに絶頂した。



挿入した触手から魔力が流れ込んでくる。やっぱり魔法少女の魔力はとっても美味しい！

「3人ともイっちゃったね！ 正義の魔法少女なのに、快感に負けちゃうなんて、だらしないの！」

周囲の人間達に、魔法少女に対する失望の色が浮かんだのが分かる。私たちが期待していた魔法少女がこんなに淫乱だったなんて！ って感じ。

「うっ……くああ……あつ、あああ……」

「あ……うう……んっ、くうう……」

「はあ、はあ……イって、しまうなんて……くうう……」

悔しがってる悔しがってる。その顔、とっても素敵。

変身が解けるまで犯さなきゃいけないから、もっともっと責めていくよ！

じゅくっ！ じゅぶっ！ じゅっちゅ！

触手の動きを再開させる。激しく、膣奥まで抉るように、触手を深く突き刺し、引き抜く。

「うっ、いやあ……あっ、んっ、あああああ……もう、いやあああ……！」

「ひゅんっ、ひっ、あ……ううう……あうっ、ぐ、うああううう……」

「ぎっ！ このっ、あぐっ、やめっ、あ……あああ……もう、やめろおおおっ！！」

触手に巻き付かれた3人が快感に悶えている。私の触手で敏感に反応してくれると、嬉しくなってさらに張り切っちゃう！

膣内のぐちよぐちとした感触を楽しみながら、膣壁全体をぐりぐりと擦り上げ、膣奥を隅々まで撫でまわす。3人それぞれの反応で、敏感なところがすぐに分かる。

「気持ちよくなるところ、どんどん責めてあげるね！」

だから、反応のいい場所を執拗に責めたくなる。

「ひぎっ！ あっ、そこ、ダメっ……あっ、あ、あああ……！」

「——くあああっ、んっ、ひうっ、あ、う、ん——っ！」

「いっ、あ、んっ、ぐあうううっ、あっ、そんな、弱いところばかり……あああああ……っ！ もう、やめろおおおっ！！」

感じている証拠として、3人の股間から溢れる愛液の量が増えている。

「あはっ！ もうイきそうなの？ どんどんイっていいんだよ！」

私は再び触手の動きを加速させる。今の3人が、これに耐えられるはずがなかった。

「くっ、あ、あっ、あああああ、ダメっ、ダメえええ……」

「んあっ、きゅうう……ひうっ、あ、んんん……！」

「ん——あああああ……ぐっ、くるっ……また、くるううううっ！！」

はい、どうぞ！

「「「イくうううううううっ！！」」」

3人が同時に絶頂した。これは偶然じゃなくて、私がうまくタイミングを調節しているからなのだ。

触手で磔にされ、白濁液にまみれた魔法少女たちの身体が、激しく震えている。まったくもう、はしたない動きをするんだから。

そして、彼女たちから放出された魔力を、残さず吸収する。3人の魔力が混ざり合った味はとってもおいしい。一度味わったら病みつきになりそう！

「あっ……そんな……っ、変身が……！」

「あ……？ 魔力が、なくなっ、しまいました……うああ……」

シャリーちゃんとローズちゃんの身体が淡く光り、ポロポロの状態が残っていた魔法少女の衣装が消えていく。最後の魔力を失って、変身が解けたのだ。髪の色が元に戻り、全裸姿になる。

周囲の観衆から、どよめきが起こった。

「あれが、魔法少女の正体……!!」

「ノーブル・ローズの正体って、まだネットに画像なかったよな」

「ああ、変身が解けている姿は初めて見る」

パシャ。

誰かが「すまほ」っていう機械を操作して、変身が解けた魔法少女の姿を撮影したみたい。目の前の光景を機械の中に保存できるんだって。魔法でもないのに、すごいよね。

パシャ、パシャパシャ!

1人が撮影したことを皮切りに、次々と撮影音が鳴り響く。

「やめてっ……撮らないで……!! 舞華を、撮るなあ……!!」

「ううっ……やめて、くださいっ……こんな姿……ああああ……」

涙を流しながら撮影を拒んでいる2人だけと、撮影音は鳴り続けている。ほんと、人間って愚かよね。自分たちを守ってきた魔法少女を苦しめるなんて。

まあ、こいつらが愚かだから、私たちが勢力を増やせたわけだけど。

「くっ、レスター……こんなこと、やめさせろ……!!」

1人魔力を残し、変身状態を維持しているアルフェリカが、私を睨む。睨むなら、目の前の人間達を睨めばいいのに。

「アルフェリカ、あなただけ、まだ魔力が残っているみたいね! 最後まで、私が吸い尽くしてあげる!」

「ぐっ、やめ……あああああっ!? ダメだっ、また、激しくされて……んあああっ、あっ、ううっ、あああああっ!!」

ぐじゅっ! ぐじゅっ! ぐじゅっ!

アルフェリカの腔中に捻じ込んだ2本の触手を、再び激しく暴れさせる。

「このっ、あっ……ぐっ、ぐうううっ……んっ、くっ、あっ、あ、ぐううううっ……」

あーあ。また我慢しようとしている。無駄だと分かっているのに、どうしてそういうこと、するのかなあ。素直に気持ちよくなればいいのに。

そういう無駄な抵抗をされると、私がますます張り切るってこと、教えてあげなくちゃ!

「ひぐううううっ! あっ! さらに、激しく、あっ、あ、くっ、んんんっ!! やっ、ダメっ! ダメ、ダメええええええええっ! これ以上は、あっ、あああああああ

あっ!!」

「イっっちゃう? みんなが見ている前で、はしたなくいろんな液体をまき散らしながら、イっっちゃう? 最強の魔法少女が、触手に負けて、またイっっちゃうの?」

「ぐっ、うううううっ! イきたくないっ……んっ、く……イきたくないて、ないっ、

のにつ……あ、くううっ、気持ち、よすぎてっ、あああああっ、ダメっ、あっ、イくなっ……イっっちゃ、ダメええええええええっ! あ——っ!! あぎいいいいっ!! あっ、イ

くっ、イぐううううううっ! イ——ぐ……ううううう……うあああああああああ

あああああああっ!!」

はい。耐えられませんでした、と。

アルフェリカは襟になりながらも大きく身体を仰け反らせて、唾液や愛液をまき散らしながら、絶頂へと達した。

止まった。

魔力が、なくなったのだ。

「あ、うろう……そんな……」

アルフェリカの身体も光に包まれ、黒髪的全裸姿になる。

「あはっ！ これで3人とも、魔力がなくなっちゃったね！」

普通の人間の姿に戻った3人の姿を見て、集められた人間達は明らかに落胆したようだった。もう自分を守ってくれる魔法少女はいない。そう思ったはずだよね。

舞台の袖に控えていたルカンドが、魔法少女の近くまで歩み寄ってきた。

「ふふふ。これで分かったでしょ？ 私達エビルズアークに立てつくと、こうなるの。さあ、あなたたちも、アーク・デュラン様に忠誠を誓いなさい！」

その言葉で、人間達の心が絶望に染まっていくのが分かる。

まったく、ルカンドったら美味しいところばかり持っていくんだから！

人間達はしばらくどよめいていたけど、やがて誰からともなく跪いて首を垂れた。心がエビルズアークに屈服した証だった。

「あはっ！ うまくいったね！」

「ええ。これでアーク・デュラン様もお喜びになるわ」

磔にされた魔法少女たちは、目に光がなく、ぐったりとしている。そんな彼女たちを背に、日がゆっくりと沈んでいく。

やがて、周囲を夜の闇が包んだ。

42

私も、早乙女舞華も、小日向沙織も、まだ生きていた。

しかし、刻一刻とその生命力を削られ続けている。

「う……あう……んあっ……あ——ああ……」

じゅぐっ！　じゅぐっ！　じゅぐっ！

私の腔内を、太い触手が勢いよく挟んでいる。触手がねじ込まれるたびに、結合部から周囲に向けて、愛液と精液が飛び散っていた。

「うぐ……あ……あ……いやあ……」

薄暗い室内。エビルズアークの基地に連れ戻された私たちは、アーク・デュランに犯され続けていた。

裸体に触手が絡みつき、空中に持ち上げられている。私たち3人は、互いの肩が触れ合うほどの至近距離で並んでいた。私の右に舞華が、左には沙織がいる。

薄汚れたロープに身を包んだアーク・デュランは、私たちの正面で、玉座に腰かけていた。

「ダメ……また、イ、くう……ああああ……！」

私が絶頂により身を震わせると同時に、腔内の触手が精液をまき散らした。

ぶしゃあああああ！

大量の精液がお腹の中に流し込まれる。私の下腹部がみるみる膨らんでいく。

「か……はっ……あ……また、出されて……うああ……」

私が絶頂するたびに、触手は精液を吐き出していた。もはや何度絶頂して、何度射精させられたのか分からない。

この基地に連れ戻されてから、どれくらいの時間が経ったのか、見当もつかなかった。数時間のような気もするし、数日経っているようにも思える。

その間、私たちはずっと犯され続けていた。

責められているのは膣内だけではない。無数の触手が胸や全身の肌への愛撫を行っていた。

「私に逆らったことを後悔しながら、死んでいけ。お前たちの命が尽きるまで、犯し続けてやる」

アーク・デュランはそれだけを告げると、ひたすらに私たちを責め続けた。

最初は泣き叫んでいた私達だったが、いつしか掠れた嗚咽を漏らすことしかしなくなっている。

犯されすぎて、汚されすぎて、3人の心は絶望に染まりきっていた。その目には、光は映っていない。

「あ……ああ……ああ——」

触手が勢いよく引き抜かれ、私の膣口から大量の精液が噴き出した。しかし、溜まった精液が完全に放出されるよりも前に、別の触手が私の膣内に捻じ込まれる。

「がっ……あうううっ……!!」

ぐじゅっ! ぐじゅっ! ぐじゅっ!

そして再開される抽送。これの繰り返しだった。

「あ……いき、ます……あああ……」

「イー——くう……うあっ——」

舞華と沙織も絶頂し、同時に精を放たれた。射精の後に再び触手を挿入され、激しく犯されている。

2人とも、時間の経過とともに疲弊していた。弱っていく彼女たちを至近距離で見るのは辛かった。しかし、私もまた、彼女たちと同じように疲弊している。

誰が最初に限界を迎えてもおかしくない状況だった。

「うあっ……もう、やめろあ……犯すのは、私だけに……うううっ……2人を犯すのは、もう、やめてくれ……」

「そんな……あうっ……犯すなら、私を……うううっ……他の2人は、解放してください……」

「悪いのは、私だから……私、を、犯し——つうううっ……あ、あああっ……」

アーク・デュランは私たちの言葉に耳を貸さず、ただ淡々と触手を動かし続けた。私たちが死ぬまで犯すのをやめるつもりはない。無言でそう伝えてきているようだった。

至近距離で犯されていた私たちは、いつからか手を握り合っていた。真ん中にいる私は、両方の手で舞華と沙織の手をそれぞれ握り締めている。

そうやって互いの存在を確認していなければ、すぐにでも精神が崩壊してしまいそうだった。

「うっ……あ……いくっ……ああ……う……ん——っ!」



「あ……ダ、メ……あ……ああ……いくっ——」
「く、あ……くるっ……あ、あ、あああ……！」
3人が同時に絶頂に達した。緊いだ手から、身体の震えが伝わってくる。
ルカンドの紋様の効果により、感度が100倍になっている今、アーク・デュランの激
しい責めに対し、絶頂を抑え込むことは不可能だった。
ふしゃあああああ！
3人の腔内に、精液が流し込まれる。

「あがつ……また、精液が……」

「ううう……もう、嫌です……おなかの中、一杯に、ああ……」

「あつ、んっ……まだ、出てる……うううう……」

射精により絶頂の快感が膨れ上がり、3人の身体がびくびくと痙攣した。

触手が引き抜かれ、また挿入される。

じゅぶぐっ！　じゅぶぐっ！　じゅぶぐっ！

「あつ……あ、あ……ああ……うああ……」

「……んっ、あ……うああ……ひうっ……んんっ……」

「やつ……あつ……ああ——んっ……ぎゅうう……」

室内に、3つの抽送音と、3つの掠れ声が響き渡る。

触手の一突き一突きが、私たちの命を削っていく。

私の膣内を、触手が抉る。

「んっ……あ——あうっ……あつ、あ……　……んっ……がっ……ああ……」

じゅっぽ！　じゅっぽ！　じゅっぽ！　じゅっぽ！

「んあ……あう……ん——　あ、う……んっ……ああ……ダメ……また、イ——くう……んんんっ……」

ぶじゃあああああ！！

「あ……がっ……出されて……あ……あ……ああ……」

舞華の膣内を、触手が抉る。

「ひうっ……んっ、んんっ……く……あうっ……はあ、はあ……んあつ……」

ぐじゅっ！　ぐじゅっ！　ぐじゅっ！　ぐじゅっ！

「やああ……まだ、イっちゃい、ますう……んんっ……あ、あ、ああ……イツ……ぎゅうう……」

ぶじゃあああああ！！

「ん——あ——いやあ——もう、いやあ——ああ……」

沙織の膣内を、触手が抉る。

「あつ、んあつ、あ……あううっ……く——あ——んあつ……」

そちゅっ！　そちゅっ！　そちゅっ！　そちゅっ！

「いや……あうっ……んっ……もう、イきたく……な——あああつ……あつ、んっ、ダメっ、あ……あああ……　イくううっ……」

ぶじゃあああああ！！

「あぐ——う……　かはっ……あ——あ——」

互いの手を握り締める力がどんどん弱まっていく。

握り合っていた手は痙攣により徐々に剥がれていき、やがて指先だけが引掛かるようにしてかろうじて繋がりを保っていたが、

「イくううう……」

「イっちゃいますっ……」

「イ、イくうっ……」

「ぶしゃあああああっ!!」

大きな絶頂と激しい射精。私たちの全身から力が抜け、手がだらりと垂れ落ちた。その手を繋ぎ直す力は、もう残っていない。

(舞華……沙織……)

ちゅぶっ! ちゅぶっ! ちゅぶっ!

「あ……う……あ……あ……」

ぐちゅっ! ぐちゅっ! ぐちゅっ!

「……んっ……あ……」

ぞっちゅ! ぞっちゅ! ぞっちゅ!

「……ひぐっ……うう……」

じゅっちゅ! じゅっちゅ! じゅっちゅ!

ぶしゃあああああっ!!

ぐったりと項垂れる私たちを、アーク・デュランはひたすら犯し続けた。

43

「アーク・デュラン様、失礼します」

そう告げてから、触手蠢く玉座の間に足を踏み入れる。私のすぐ後ろには、人型に戻ったレスターがトコトコと付いてきていた。

「あはっ! お父様、まだ犯してんだ!」

「この者たちは、犯しながら殺すと決めている」

アーク・デュラン様の触手が、3人の魔法少女を犯している。3人とも触手に激しく突かれていたが、まったく反応がなく、生きているのか死んでいるのか、判別がつかない。

「それで、ルカランダよ。私に何か用か?」

「はい。回収した魔法少女のステッキですが、D r、バルドが詳しく解析を行いたいと申しています。許可してもよろしいですか?」

「好きにするがいい……いや、待て。バルドに渡す前に、1つ趣向を凝らすとしよう」

天井から、私の目の前に触手が垂れてきた。その触手は、私が手にしていた3つのステッキを絡めとると、魔法少女たちの方へ運んでいく。

「なにをされるつもりですか?」

「なに。この者たちの命を、この者達が愛用していたステッキで奪うのも一興かと思っ
な」

1本の触手で1本ずつステッキを握り、その柄を魔法少女の秘所へと向ける。

すると、挿入していた触手を引き抜いた直後、ステッキの柄を勢いよく膣内へと突き刺した。

「ひっ、あああああああっ！」

ぐったりとした3人の魔法少女が、同時に悲鳴を上げた。

44

こりこりとした硬いものが膣内に捻じ込まれ、朦朧としていた意識を強引に覚醒させられる。

(なに、これ……?)

膣奥を削られる痛み。快樂漬けだった身体が過剰に反応している。

私の体内に捻じ込まれたもの、それは、

(ステッキ……?)

私の左右、沙織と舞華の膣内にも、彼女たちのステッキが挿入されていた。

「このステッキで、お前たちの体内を引き裂いてやろう」

アーク・デュランの声が響く。私達へのトドメは、私たちのステッキを使って行おうということだろうか。

悪趣味が過ぎる。

このままアーク・デュランが触手に力を籠めれば、ステッキによって私たちのお腹は引き裂かれてしまうだろう。

しかし……

(この、瞬間を、待っていた——!)

私の膣内にはステッキが挿入されている。つまりこれは、私とステッキが肉体的に接触しているということだ。

魔法少女とステッキを接触させることの意味は、アーク・デュランもよく分かっているはずだ。今の私達には、かけらほどの魔力も残っていない。そう確信しているからこそ、こうやってステッキとの接触を許しているのだ。

だが、それは油断だ。私に魔力を回復できる手段があることを、疑うべきだった。

(舞華の魔力結晶……ここで使う!)

舞華が生成し、家政婦の彩音によって私に託された魔力結晶。かつて枯渇した私の魔力を最大まで回復してくれたが、それでもなお、ある程度の魔力が残っていた。

私は魔力結晶を魔法で加工し、奥函の裏側に吸着させていた。それをついに、使う時が来た。

(お願い!)

私は魔力結晶から魔力を解放する。結晶からあふれ出した魔力は、みるみる私の体内に吸収されていった。

「なんだ、これは……魔力の光だ?」

「変身……!」

私はステッキに魔力を送り込み、魔法少女の姿へと変身した。

魔力で肉体が強化される。私は私にまわりついている触手を引きちぎり、床へと着地した。

「くっ、うろうっ！」

私は腔内からステッキを引き抜く。愛液が付着したそれを握り締め、私はステッキの形状を剣へと変化させる。

「たあああっ！」

刃を振るい、舞華と沙織を拘束する触手を断つ。支えを失った2人の体が床へと落下した。

その間、数秒。アーク・デュランは虚を突かれていたが、すぐに触手を繰り出してきた。

「星よ！」

私はステッキの形状を元に戻すと、素早く魔法を詠唱し、攻撃を防ぐ結界を周囲に張り巡らせた。アーク・デュランの触手が結界に阻まれる。これではらくの間、時間を稼ぐことができる。

「舞華！」

私は舞華に唇を重ねた。

「アルフェリカ……さん……？ この魔力……」

「ぶはっ。あなたが託してくれた魔力です」

続けざまに、私は沙織とも唇を重ねる。

「……んむっ。はあ、はあ……どうして、魔力が戻ったの……？」

「説明は後です。この結界は長くは持ちません。この機に、アーク・デュランを討ちます」

「……！ 分かった」

舞華と沙織も魔法少女の姿へと変身し、腔内からステッキを引き抜きながら立ち上がった。

3人とも、魔力による身体強化で、かろうじて体を支えている。長い時間は戦えそうにない。

「私アーク・デュランを狙います！ 詠唱の間、2人は援護を！」

そう叫び終わると同時に、私はステッキに魔力を凝縮していく。残った魔力を全て使って、最大級の魔法を放つ。それしかない。

「オーバーグロウ！」

ノール・ローズが魔法で私を強化する。これで、魔法の威力を何倍にも跳ね上げることがができる。

（ありがとう、舞華）

だが、私の詠唱が完了するより先に、結界に限界が来た。前にいるアーク・デュランだけでなく、後方のレスターも触手を伸ばし、結界を攻撃していた。ダメージが蓄積した結界は弾け飛び、私たちは無防備になる。

「風よ！」

シャーリーがステッキを振るい、無数の風の刃を繰り出した。私たちに迫る触手の群れを、刃で次々と切り落としていく。

（ありがとう、沙織）

2人の想いが私に力をけている。魔力は高密度で圧縮され、詠唱が完了する。

（アーク・デュランを倒すには触手のすべてを消滅させなければならない……）

中途半端に触手を破壊しても、致命傷にはならないのだ。

アーク・デュランが激しく触手を振るう。シャリーが巻き起こす風と連携し、ノープール・ローズも光の魔法を放ち、それを防いでいる。

魔法陣から 大量の光の柱が立ち昇った。それらの光が、天井を埋め尽くすアーク・デ
ユランの触手を次々と穿ち、消滅させていく。

「消え去れえええええええええつ!!」

室内が大きく揺れた。天井に大穴が空き、光の柱が蒼天の中に吸い込まれていく。

「そんな……馬鹿な……私が、消える……だと……！」

「これまで多くの人を苦しめた罪、今こそ贖え！」

「おのれ！ おのれ！ おのれええええつ！」

「いけえええええええええつ!!」

「うおおおおお——」

アーク・デュランの声が徐々に掠れ、やがて聞こえなくなった。

「はあ、はあ……」

すべての魔力の解放を終えた私は、その場に膝をついた。

「アルフェリカさん！」

ノーブル・ローズとシャーリーが私に駆け寄ってくる。

「私は、大丈夫、です……」

「……アーク・デュランは、消滅したの？」

シャーリーが頭上を見上げながら尋ねる。

「ええ。奴の禍々しい魔力は、消え去りました……」

頭上から太陽の光が差し込み、私たちを包む。

この勝利を、祝福してくれているかのように思った。

「そんな……お父様が！」

レスターがその場に崩れ落ちた。

「嘘だっ……嘘だあああああ！」

顔を伏せて泣き始めるレスター。どうやら戦意を喪失してしまったらしい。

(となると……)

「ルカンド、残るはお前だけだな」

「……アーク・デュラン様が負けるなんてね。でも、あなたの魔力は残り少ないでしょう？ そんな状態で、私に挑むつもり？」

「確かに私の魔力は尽きかけている。だが――」

「たああああっ！」

シャーリーがルカنداに飛びかかり、至近距離から衝撃波を放った。

「ぐはっ！」

ルカنداは吹き飛び、壁に激突して倒れる。

「ぐっ……何を……」

起き上がろうとするルカنداの目の前に、シャーリーがステッキを突きつける。

「私にはまだ魔力がある！ 観念しなさい！」

「や、やめなさい……！ 私を殺したら、あなた達に刻んだ紋様は、二度と消えないのよ！」

「ふーん……じゃあ、今すぐ紋様を消してくれる？ そうしたら見逃してあげる」

「……本当でしょうね？」

「いいから、早くしなさい」

「……」

ルカنداがシャーリーの身体に触れると、彼女の鎖骨や脚に描かれていた紋様が水に溶けるように消え去った。

「ほら、2人の紋様もよ」

「分かってるわよ」

シャーリーがルカنداを立ち上げらせ、私たちのところまで移動させる。ルカنداが私や舞華に触れると、同じく紋様が消え去っていった。紋様みれだった舞華の身体が、今は元通り綺麗になっている。

「これでいいでしょ？ 私はもう行くわ」

「さあ、どうしようか」

「な……！ 正義の魔法少女が約束を破るの？」

「私は他の2人と違って、悪の魔法少女だから。あなたを逃がしてもいいことがなさそうだし、ここでトドメを刺しておいた方がいいよね？」

シャーリーが再び衝撃波を放とうとした、その時だった。

ゴゴゴゴゴ。

轟音と共に、地響きが辺りを包む。

「アルフェリカさん、これは……？」

舞華が周囲を見回しながら尋ねる。

「分かりません。でも、長くここに留まるのは危険のようです。急いで脱出しましょう」

「分かりました。シャーリーさん、行きましょう」

「ええ。道案内は任せて」

私たちは疲労困憊の体で、基地の出口に向かって駆けだした。

「……命拾いしようね」

私は、部屋の外に駆け出していく3人の姿を見送った。基地の崩壊が始まらなかったら、シャーリーの衝撃を受けて命を奪われていただろう。

「レスター！ いままで泣いてるの？ 早く逃げないと生き埋めになるわよ！」

私の呼びかけに対し、レスターは反応しない。よほどアーク・デュラン様が消滅したことがショックなのだろう。

（もう時間がない。置いていくしかないわね……）

私は翼を広げ、アルフェリカが空けた頭上の穴に向かって飛び上がった。

（これから、どうしようかしら……？）

アーク・デュラン様はもういない。元の世界に帰還する望みは絶たれてしまった。

（この世界で、生きていくしかないわね……）

幸い、この世界には私を慕ってくれる人間達がいる。彼らとなら、新しい目標を見つけられるかもしれない。

私は基地の上空へと脱出した。足元では、基地が崩壊し、山が押しつぶされるように形を変えている。

レスターの姿は、もう見えない。

46

木陰の中、崩壊する基地の様子を眺める、白衣の男の姿があった。

「基地を自爆させたのは、Dr.バルド、お前だな？」

「やあ、グリーヴァ。無事だったのか」

白衣の男性は振り返る。地面からスライムが染み出し、人の形を作った。

「どうして基地を破壊する必要があった？」

「あそこには、大量の研究データがあったからね。魔法少女に奪われるわけにはいかなかったのさ」

「魔法少女に知られて困るものとは？」

「さあね。今となっては、瓦礫の下さ。もう意味はない」

「……お前ほどの奴が、研究データを持ち出さずに、基地だけ破壊したとは思えないがな」

「勘が鋭いじゃないか。想像にお任せするよ」

「研究データのことはいい。だが、基地内に蓄えていた大量の魔力はどうなった？」

「埋もれたよ。あの下にね。今頃大気の中に霧散している頃さ」

「……まあいい。魔力はお前にくれてやる。何を企んでいるかは知らないが、好きにするといい」

そう言って、グリーヴァは地面の中に溶け込んでいく。

「君はこの先どうするんだい？」

バルドの問いに、グリーヴァは答えた。

「これから考える」

スライムは完全に地面の中に消え去った。

「これから、か……僕も考えないと。どこかに僕の能力を高く買ってくれるところがあるといいけど」

白衣の男は、ゆっくりと下山を開始した。

あれから、3日が経過した。

私たちはシャーリーの先導の元、捕らえられていた女性を救出しつつ、崩壊する基地からの脱出に成功した。

その後は、舞華の屋敷で体を休めることに専念した。度重なる凌辱により、私たちは心身ともに疲れ切っていたが、家政婦の彩音が献身的に介護してくれたことにより、みるみる体力を回復させていった。

そして、3日後の夜、物音に気付いた私は、ベッドを出た。

「行ってしまうのですか？」

屋敷のエントランスで、今まさに外への扉に手を掛けようとした人物に、声をかける。

「気付かれちゃったか」

その人物、小日向沙織は振り返る。

「ここを出て、どうするつもりです？」

「うーん。まだ決まっていないけど、いつまでもここにはいられないから」

沙織は悲しそうに目を伏せる。

「私は悪に味方して、そのせいで多くの人が苦しんだ。だから私は、あなたたちと一緒にはいられない。どこか別の場所で、ひっそりと暮らすよ」

「沙織……」

結局私は、彼女を苦しみから救ってあげることができなかった。

いや、救ってあげる、というのは傲慢な考え方なのかもしれない。彼女が犯した罪を償えんとしたら、それは彼女自身の手によるものに他ならない。

「寂しくなりますね」

「……早乙女さんに伝えておいて。今までありがとうって。それじゃ」

「待って、これを！」

振り返ろうとする彼女に、私は手にしたものを放り投げる。

「！」

沙織はそれをしっかりと掴んだ。『空』の魔法少女のステッキを。

「これは、もともとアルフェリカの世界のものでしょうか？ いつまでも私が持っているわけにはいかないから」

「いいえ、それはあなたに必要なものだと思います。だから、持って行ってください」

「……分かった。ありがとう、アルフェリカ」

「それと、あと1つだけ。今、あなたの心は、暗闇に囚われているかもしれません。でも、いつか心が晴れ、青天の空が見える時が来ます」

「どうかな。私の心は、あの時からずっと、夜の中にいる。晴れる時なんて、もう来ないよ」

「明けない夜はありません。それに、夜空には、いえ、夜空にこそ、星は輝きます。あなたが私を助けてくれたように、他の誰かを助けることだって、きっとできるはずです」

「……」

沙織は何か考えるような表情をしながら振り返り、
「ありがとう」

と短く告げると、扉を開けて外に出ていった。

私の想いがどこまで伝わったかは分からない。あとは、彼女次第だろう。
「行ってしまいましたね」

エントランスの奥、柱の陰から、舞華が姿を現した。

「いたのなら、声をかけてあげればよかったのに」

「そのつもりでしたけど、途中からアルフェリカさんに任せることにしました。小日向さん、いつか帰ってきてくれるでしょうか？」

「ええ。帰ってきてくれます、必ず」

「そうですね。信じましょうか」

舞華はゆっくりとこちらに近づいてくる。

「ところで、アルフェリカさんはこれからどうするんですか？」

「私？」

「元の世界に帰っちゃうとか？」

「そうですね……」

私はアーク・デュランの魔法に便乗してこちらの世界にやってきた。元の世界に戻る手段については、今のところ思いついていない。

「アーク・デュランは倒したけれど、まだ四魔将が残っています。奴らの動向を見極めなければなりません。それに、こっちの世界に移したはずのステッキが、あと2本あるはずなので、探さない」と

「それでは、そのステッキ探し、私もお手伝いさせていただきますね」

「……いいの？ 舞華には、関係ないことなのに」

「関係ないなんて言わないでください。同じ魔法少女ですから、協力させてください」

「ありがとう、舞華」

私がお礼を言うと、舞華はふふふっと笑った。

「ではその間、私の家にいてくださいね」

「なにからなにまで、ありがとう」

私は舞華に頭を下げた。この世界で、この少女に出会えたことが、私にとって最大の幸福だったのだと、改めて思う。

（みんな、すまない。私はまだ、この世界を離れるわけにはいかない。勝利の報告は、もうしばらく待っていてくれ）

私は遠い世界にいる仲間たちに思いを馳せる。

もしも元の世界に戻ることができたなら、この世界で出会った心優しい魔法少女たちの話を、真っ先に伝えるでしょう。

（おわり）

あとがき

この度は本作品をご購入いただき、誠にありがとうございます。

魔法少女アルフェリカシリーズ、本作で完結となります。

「これで完結？ まだ伏線残ってるだろ！」と、思われる方も多いと思います。特にシャーリーがプリズム状態に戻るかどうかが気になるところだったかもしれませんが、本作の主人公はアルフェリカであり、シャーリーが元の姿に戻るという展開は、彼女に焦点が当たりすぎるため、避けています。

では、シャーリーの件を含め、残った伏線はどうなるのか。今の段階では、「企画を練っている」とだけ申し上げておきます。魔法少女アルフェリカシリーズの完結をもって魔法少女シリーズも完結だと宣言していましたが、それに偽りはありません。では、彼女たちが再び皆さんの前に姿を見せるのは、どのような形になるのか。勿体ぶるようで恐縮ですが、確定していないことも多いため、時期が来ればお知らせしたいと思います。それまで皆さんにお付き合いいただけるよう、活動が続けて参ります。

魔法少女シリーズがここまでたどり着けたのは、挿絵イラストを描き続けてくださった有魚様のおかげです。有魚様のお力添えがなければ、シリーズをここまで続けることはできませんでした。有魚様に出会えたことが、私にとって最大の幸福だったのだと、改めて思います。月並みな言葉ですが、本当に感謝しています。ありがとうございます。当面は別の作品でお世話になりますので、引き続きよろしく願いいたします。

それでは、また何かの作品が皆様の目に留まることを願って、あとがきとさせていただきます。

2020/11/14 端音 乱希

奥付

発行：2020/11/14

小説：端音 乱希 (<https://ci-en.dlsite.com/creator/4576>)

挿絵：有魚 (https://twitter.com/_ariu0) (<https://www.pixiv.net/member.php?id=6289657>)

製作：No Future

連絡先：nofuture.hr@gmail.com

この物語はフィクションです。実際の人物、団体、事件とは一切関係ありません。

本作品は成人向け作品です。18歳未満の方の購入・閲覧を禁止します。

本作品の全部あるいは一部を転載・配信・送信する行為を禁じます。